

---

# 阿修羅の巷

うるる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

阿修羅の巻

### 【Nコード】

N8120G

### 【作者名】

うるる

### 【あらすじ】

踊祝中学校で新たに設立された部活”なんでも部”。部長レイン・カンダクゼノスを中心に個性的なキャラで織り成すストーリー。さて、今日はどんな依頼が彼らを待っているのか…？

## プロローグ

「ただいまより踊祝中学校、入学式を始めます。一同礼。」  
そう司会の先生が言い、入学生・保護者・在校生・来賓や他の先生方も座る。

今日来たばかりの入学生は何ともあどけない表情。

そんな緊張の中、校長先生の話や来賓の紹介、在校生代表の話などが時間と共にゆっくり続いていく。

そして在校生の歓迎の挨拶の後は、入学生代表の挨拶であった。

「入学生代表、レイン・カンダクゼノス」

司会の先生に呼ばれて、立った少年。彼がレイン・カンダクゼノスの様だ。

レインはゆっくりと、姿勢良く、一歩ずつ歩き前方の中央へと向かう。

「…なあ、入学生代表ってどうやって決まるんだ？」

「アレじゃない、入試で成績が一番だった奴とか？」

「えっ、そうなのか…？」

そんな声が在校生席から聞こえてくる。そんな会話内容を澄ました顔で聞いていたレイン。

そして所定の場所に着くと、手元にある和紙の様なものを広げる。

これがスピーチ用の紙らしい。

「寒さも和らぎ、暖かい陽光が差し、春日のどかな季節となりました。」

ここで一度言葉を切る。するとレインは自分の書いた内容をゆっくり確認する様な目で文章をさらりと黙読し、次に驚く行動に出た。

「…さて、私達は無事にこの踊祝中学校に入学し、恵まれた環境と私達をこれから見守ってくださる先生、先輩方、私達のためにお時間を頂いてまでお越しくくださったご来賓の皆さん、そして保護者に囲まれ、私達は幸せな入学式を迎える事が出来、大変嬉しく思いま

す…」

こんな文章、別に何の変哲も無い文章なのだが、誰もが驚きの顔を隠せない。

それもそうだ。この少年は先ほどまで読んでいた紙を閉じ、話しているのだから。

その状態のままレインは淡々と喋り続けた。もちろん、その後も自分の暗記した文章を。

レイン以外の者は、ただその暗記力に驚いたり、「どっかで忘れてりしないかな…」とさりげなくレインの失敗を期待したり、しっかりとレインの話を聞いたり…

しかし、そんなどよめきの中でもレインは嘔まず、忘れること無く完璧に数分間に渡る原稿を読みきった。

読み終わった後、会場から自然と拍手が湧き起こった。

レインもそれに答える様にお辞儀をしたのだった…

入学式も無事に終了し、入学生は自分の教室を確認して、まだ見えぬ期待に胸を膨らませながら小学校時代の同級生とお喋りをしていった。

たまにその話の内容に興味を持てば、他の学校の生徒でも今は同じ中学校の生徒の一人。

話の仲間入りも出来、新たななる友達の輪が広がるのだ。

でもやはり人々が興味を持ったのは、先ほどのレインの暗記スピーチであろう。

「なあ！あの文章どのくらいで覚えたんだ？」

「立派な話だったわね！あれは自分で書いたの？」

「あんな凄いスピーチ聞いたの初めてだ！」

それにレインは明るく、誰にも抵抗すること無くペラペラと話喋った。

「ああ、あのスピーチね。あれは俺一人で頑張ったんだよー。ともかくあーゆー場を提供されると、出たくなって張り切っちゃうんだ

よね。だから、『出ませんか?』と言われたその日から、暇を潰してまでも頑張ったんだ!暗記か三日で覚えられたかな?なにせ自分の書いた文章だから、内容は大体把握してるんえだね!でもそんなにみんなに褒められるなんて、思いも寄らなかつたよ。みんな本当にありがとね!」

そのお喋りで話しやすい性格のレインには、次々と人が集まった。そして話は様々な内容から楽しんだ。レインは多種多様に、話をしている人に合わせ喋る。

そして喋るときにジェスチャーを交えたり、感情を込めたりして話すので、話した人達は歓喜に包まれた。

すると、担任の先生が入って来た。

担任の先生は簡単に挨拶を済ますと自己紹介をしてくれた。

先生の名前は『モンブルク先生』。理科の担当をしているとのことであつた。

そう言われると“モンブルク”という名前がいかにも理科っぽく聞こえる。

モンブルク先生は自分の自己紹介を終えるところで言った。

「さて、今度は君達の自己紹介でもしてもらおうか。自分の事が分かる様な自己紹介であれば何でもいいよ。ただしあまり長すぎない様に。日が暮れてからでは困るからね。さてまずは…」

と先生は辺りを見渡し、すぐさまレインの顔を見付けた。

「じゃあ、生徒代表レイン…」

「はい!」

レインは勢い良く立ち上がって返事をした。しかし、モンブルク先生の話は続いていた。

「…はさつき喋ったし後で、じゃあ出席番号一番の君からね。…ん?レインどうした、そんなに勢い良く立って?」

レインは顔を赤らめながら「いえ、なんでもありません。」と恥ずかしそうに言った。

それを見ていた隣の女子がクスクス笑いながら言う。

「レインくん、張り切りすぎよ。」

「そうだね、すまないすまない。」

レインも苦笑いしながらそう言った。

自己紹介も着々と進んでいった。自己紹介はみんな名前と「よろしくお願いします。」というだけで目立った生徒はいなかった。

「それもそうだ。初日から張り切って言ったあかつきには、一躍人氣者が虐められっ子のどちらかだ。」

とクラスの誰でも無い誰かがそう言う。するとその声にレインは返す。

「そうだね。まさに“天国か地獄”。だれもそんな怪しい橋は通らないよね。」

その時、丁度最後のレインの番になった。レインは今度こそ勢い良く立ち上がり先ほどと同じような歩き方で教壇に上った。

そして息をゆっくり吸い、自己紹介を始めた。

「俺の名前はレイン・カンダクゼノス。表と裏の完全孤立した人間を持っています。是非みなさん、裏の俺を目覚めさせない様にお願います。あつ、ちなみに今は表なので、よろしく！」

この一言からすべてが始まった…

依頼No.1に続く

## 依頼 No. 1 (前)

「あつ、ちなみに今は表なので、よろしく!」

そうレインが自己紹介をした教室は完全に凍り付いていた。それもそうだが、いきなり性格の表裏の話なんかされても返す言葉が無いからだ。

しかしそれでも気にせずレインは自己紹介を続ける。

「えーつと…誕生日は12月の21日、血液型は…」

「ちよつ、ちよつとレイン君!」

と止めたのは担任のモンブルク先生だった。先生も少し苦笑いをしていたが、ともかく質問した。

「何故レイン君には表と裏の完全孤立した人間を持っていると分かるのかい?多重人格者なら聞いた事あるが、一人に二人もの人間が入っているなんて聞いた事が無い!…本当はただの多重人格者なんですよ?」

レインはそれを聞くと鼻で笑い、すぐに答えた。

「いやだなあー、本当にいるんですって!これ以上の詳細を教えると裏の私が怒ってしまいますので、これ以上は言いませんけどね。すみませんね…ただ、“表裏がある”だけ把握してもらえれば嬉しいです。」

モンブルク先生もしぶしぶ考え「分かった」と言い、それ以上何も追求しなかった。

それは他のクラスメートもだった。今裏の人格についての質問をすれば何をしでかすか分からない、ましてや、裏の人格なんか目覚めさせたらとんでもない、と思った人もいる。

しかし、こういう人もいた…馬鹿馬鹿しい、ただ注目を集めるだけの工作だろ?表裏二人の人間が一人の肉体の中にある訳無い、と。

レインもそれを計算して言ったのか、はたまた裏の人格の指図によって言ったのか。それはレイン以外分からなかった。

レインは黙りこくったクラスメートを見渡し、ある提案を出した。  
「そうだ、何か質問があれば承るけど…何かある？」

しかし、誰も手を挙げなかった。レインの性格について思考回路が働き、誰も手を挙げる暇が無かったのだ。

そんな中、一人のクラスメートが手を挙げた。

「あの…右目の眼帯はどうしたんですか？」

そのクラスメートの言う通り、レインの右目には黒い眼帯があった。

「ああ、これね。…小さい頃に大きな怪我をしまっただけから眼帯で隠している訳。」

「今の医療技術でなら治せるんじゃない？」

と別のクラスメートのツツこむ様な素早い質問にもレインは淡々と答えた。

「そうなんだけど、俺は自分の目を大事にしたいという気持ちから、再び同じ惨事が起こらない為にもわざと残してあるんだ。」

その答え方にはみんなも納得した、レインの良い志だな、と。

それ以外の質問もあった、好きな教科、食べ物、スポーツ…どれも中学一年生らしい質問だった。

質問が終わると、今度はレイン自身が質問した。質問対象はモンブルク先生。

「あの…俺、新しい部活を作りたいと思っているんですけど、何人で部活が申請できるんですか？」

モンブルク先生は、意外な質問だったので驚いていた。しかし新しい事を始めようとするレインに先生は前向きだった。

「ほおー、新しい部活を作るのか！それは良い試みだな。だが、ここで言ったからには上辺だけじゃなくなるからな、覚悟しとけよ！」

「はい。」

レインは自信たっぷりに頷いた。

モンブルク先生もその自信あり気なレインの顔にそれを託した。



「分かった。私も先生方と相談しておくから、少なくとも…そうだな。五人は部員を集める。」

「五人だけでいいんですね？」

「そうだ、とりあえず五人は作っとけ。私もそれで交渉してみる。」

「そうだ、後で部活の名前、内容も書いてもらおうと思う。今は内容は聞かないが、それも承諾しとけよ。」

「了解しました。じゃあみんな、興味がある人は俺の所に来てくれ。平凡な部活に飽きた奴は来い！聞きに來た人はほぼ決定と見なすぞ！まあ、ゆっくり考える事だな。」

と言ったレインの目に大いなる野望を抱いていた…

「どうだ、反応は？」

と言ったのは“表のレイン”。ここはレインの頭の中、通称“性格の分岐点”である。

勿論レインが言った通り一つの肉体の中に二人の人格が潜んでいるので、表のレインと裏のレインが喋る事は友達との会話の様に当たり前なのだ。

だから、こうやって一人の頭の中で二人が喋る事はレインの常識範囲内に過ぎないのだ。

一般の人間から見れば「仰天驚愕不思議人間ショー」ってところか。そんな“表のレイン”の質問に対して“裏のレイン”が答える。

「あまり、誰も興味なし。この学校に入ってきた奴の多くは、既に行きたい部活が決定しているんだよ…だから今のうちだ。上辺だけでお前の野望も中途半端に終わるのさ。」

「どうやら裏のレインは新部活の創設に全く興味が無いらしい。むしろ批判している様にも思える。」

「そんな事言うなよ！折角俺の野望を叶えようと思っているのにさ。きつとお前も自由に行動できるぞ。だからさ一緒に新し…」

「五月蠅いな、ゴダゴダいうんじゃないよ。テメエで勝手にやってるアホが。」

「はいはい…勝手にやつと来ますよ。」  
表のレインも裏の興味無さに相手にする気を無くしたようだ。  
「分かったよ勝手にやつときますよーだ。」  
そして頭の中の二人のレインの論争が終わったので、元の“表のレイン”に戻っていた。  
また、丁度その時先生による諸注意も終わっていたのだ。まさにグツトタイミングと言ったところか。

「じゃあ、今日はこれまでとして帰りますか。起立、礼。」  
「さようなら！」

そして人々は学校指定の新品靴を持ち、さっさと帰っていくのだった。

今日は収穫無し…も当たり前か、と思いレインも靴を持ち、帰ろうとした時だった。

「レイン君！」

と誰かが呼びかけた。物語でよくある当たり前の展開「諦めた瞬間にやってくるパターン」である。

レイン自信もそれを待っていた。

「おっ、来た来た。」

とレインは内心大喜びでその人のもとへ行った。

その人はレインの隣の席の女子で先ほどの自己紹介の時「レインくん、張り切りすぎよ。」と言ってた人である。

「えーつと君は確か…」

「ペルマ・ゲインズ。以後お見知りおきを。」

「ああ、どうも。んで、俺に何か用でも？」

レインは期待に胸を膨らませながらペルマに尋ねた。するとペルマの口からは予想通りの言葉が返ってきた。

「レイン君の作る新しい部活に興味があつてね。話聞かせてくれる？」

「待つてました！いやあー、誰も来ないかと思いましたよ。でも良

かった良かった。それに女子は大歓迎!!」

レインは嬉しくてすぐさま鞆の中から資料を出した。それは一枚の紙だった。まだ初期段階でそんなに決まっていなから一枚の紙で十分である。

レインはペルマに「はい」とその紙を渡した。そしてその紙にはこう書いてあった。

『なんでも部(仮)：名前の通り、何でもする部活。ただし依頼主の依頼から成立される。表面上では先生がたの依頼を無償で引き受ける。例えで考えているのは校外学習の実行委員役や体育祭、文化祭、その他の行事の準備、後片付け、それ以外でもお手伝い出来る事があれば何でも。』

『しかし、裏の活動は違う。依頼主は先生では無く生徒、そして依頼は可能な限りどんな事でも行う。中一で命の危険性は無いと思うが、それぐらいの覚悟も時には必要となる。勿論裏の仕事内容は完全極秘で誰にもバラしてはならない。そして、依頼が完了すればそれに値した報酬をもらうシステムとなる。』

まだこれだけしか書いていないが、物凄い壮大な部活動となっていてペルマは大いに驚いた。

「こっ…こんなの本当にするつもりなの!?!」

「当たり前。言ったからには最後まで責任持ってやりたいね。」

レインはニコツと笑ってペルマにそう言った。

ペルマはその事実には少し驚いたまま立ち竦んでいたが、やがて我に返ってこう言った。

「…面白そうじゃない。」と。

「んだろ!?!じゃあさっそく加入を…」

「ちよつと待って!」

とペルマはレインの話を止めた。どうやら言いたい事がある様だ。

「確かに面白いわ、けどこの部活本当に三年間続けようと思ってい

るの？とても大きなリスクを背負っているわ。きつと数々の問題も出てくるだろうしそれじゃあ一年も経たない内にすぐ先生に見つかるわ！依頼主が喋るかもしれないし、裏の活動中に先生に出会うかもしれない、それから…」

「それを恐れちゃ一生始まんない。」

と今度はレインが口を挟んだ。

「リスクがつきものだなんてモンは分かっている。けどそれじゃあ何にも始まんないじゃないか。…例えば冒険者だって最初は数々の困難を予想するけど、それを恐れず旅に出て、どんな困難も平然と立ち向かってるじゃないか。俺もそんな冒険者みたいに旅してみたいんだよ！」

「それはただの空想に過ぎない！現実には全ての困難にちゃんとした対処が出来るとは思えないわ。見つければきつと退学よ、退学！」

「じゃあ退学ギリギリまでやってみないか？」

そのレインの真剣な一言にペルマは全てを飲み込まれた様な気がして無言になった。

「絶対退学にならない、義務教育の範囲内だから退学なんかさせられないのさ。それは俺が保障するよ。」

ペルマは考えた、ゴタゴタと様々な事を考えた。しかしどちらにする答えはイエス・ノーの二つなのだ。

それまでレインはずっと無言でその場に立っていた。ペルマの答えを待ったために。

「…分かった。レイン君、私が頼む依頼を私が納得するようにこなしたら入部してあげる。」

それがペルマの出した答えだった。レインも最初は驚いた表情を見せていたが、次第に真剣な表情に戻っていった。そして一言。

「その話、聞かせてもらおうか？」

「ええ、初の仕事請けて貰うわ。私の依頼は人の追い返しよ。」

「ほおー、嫌いな人でもペルマさんをつけているのか。」

「その通り…その人は小学校からの同級生で元々は付き合っていたの。でも私、ある事が原因で卒業式前に私から別れたの。…それからよ、彼のしつこい性格が露さらになったのは。それは春休み始まってすぐだわ。よくわたしのポストに贈り物が届くようになったの。宛先無し、彼の名前が書いてあるだけの贈り物。最初は誰か他の人の悪戯かと思った、けど贈り物を見てすぐに彼だと分かったわ。」

「どうして？」

とレインは尋ねた。贈り物自体に何か付いてるのか？その人の手紙とか、分かるような何かが…とレインは色々考えてみた。

しかしペルマの答えた理由はもつと判り易かった。

「彼の贈られてくる者は全部センスが悪いの！しかもそれは付き合い合った当時から。彼は一体何を考えているのだろうか？」

そうか…とレインは思った。それも仕方ないのか、男はなかなか女性の最先端など知らないものだ。

一体何を着たら可愛く見えるのか、そんなの男性から見てもええば変でない限りどれも「可愛い」と言ってしまう様なものである。

現にレインだって最先端の流行りモノなどほとんど知らない。

「贈り物をする際は十分に気をつけないといけないものだな。」

と頭の中で表のレインがそう言う。しかし裏のレインが鋭くツツこむ。

「彼女すらいねークセに。」

それに表のレインは完全に意気消沈した。

そしてすぐさま元のレインに戻る。ペルマの話の続きが始まったのだ。

「…と言う訳でそんな彼を何とかして欲しいの。彼の名前は“マローネ・ベルカス”」

その名前にレインはすぐさま話を挟む。

「マローネ・ベルカス！？…ベルカス家と言えば代々受け継がれる大富豪邸じゃないか！そんな人と付き合ってペルマさんもさぞか

し幸せだっただろうに……」

「全然幸せじゃなかったわね!!」

ペルマはレインに文句をつける様に言った。レインは少し後ずさりして体勢を直した。

「……そうか、理由は尋ねない。とっとと依頼を完了させて入部して貰わないといけないからな。」

とレインは先ほどの部活の説明書きをペルマから返してもらおうとすぐさま鞆にしまい担いだ。

「ペルマさん、家まで案内してもらおうか。もう作戦は決まってる。」

とレインは自信たっぷりな口調でペルマにそう言ったのだった……

依頼 No. 1 (後)

「それで、どんな作戦なの？ちなみに私の家はマンションだから、いつも夜中になる前のお父さんが帰って、そのついでに手紙を見るんだけど、それがその日の最後に手紙の有無が分かる時なんだ。でもその時は無く、次の日の朝にある…つまり信じがたいけどマローネが来るのは多分夜中よ。」

下校道、ペルマが案内しながらレインに問いかける。どうやらペルマの家は歩いて十数分掛かるらしい。

「だったら尚更だ。その作戦は上手くいく。」

「だから何なの？隠してないで早く言つてよ！」

「刑事ドラマでよくある作戦…“張り込み作戦”だ！」

一瞬その場がシラけた。ペルマがその作戦に何も言う事が出来ないからだ。先ほどの自信満々の表情は全てここに有ると思うと言葉を返せない。

レインは本気で言葉を返してもらおうとペルマを伺っている。仕方なくペルマは言葉を返した。

「…本気で張り込むつもり？」

「当たり前さ、それ以外方法が見当たらない。やっぱり犯行を行っている間に現行犯逮捕しとかないとね。」

はあ…私はこの人と一緒に部活をしていく様になってしまつかもしれませんのね…とペルマは心の中で泣き叫んだ。

それでも溢れる感情を抑えレインを信じ、家へと歩いていったのだ。

十数分後、一行はペルマの住んでいるマンションに着いた。

「じゃあ、早速お宅調査つと…」

レインはそう言い無邪気な感じでマンションに入ろうとしたが、呆気無くペルマに捕まった。

「ダメ、まだ他人の様なあんたが女性の部屋に入れると思うとでも！？」

「冗談冗談。まあ、家までのルートは記憶させて貰ったからとりあえず今日は帰るわ。あなたが寝ている間にチヨチヨイと終わらして明日報告するから。」

よく一回だけでルートを覚えられるね…でも今日の入学式見ると驚くほどでもないか、とペルマは心中そう思った。

「…分かったわ、じゃあ明日寝不足で死なない様にね。それじゃ、また明日。」

ペルマはそう忠告し、レインとの別れを告げた。

レインも軽く手を振りその場を後にしたのだった。

「…さてと、暇つぶしの道具と食料と眠気覚ましぐらいだけでいいかな…？」

と表のレインはそう裏のレインに如何にもわざとらしく話掛けた。

裏のレインはそれにこう答えた。

「マンション用ピッキング用品、金属バット、果物ナイフ、警察に捕まった時の為の親に対する別れの手紙…」

「…最後だけしんみりしてるなあ…っておい！！はあっー、ごめんね。聞いた俺が馬鹿だった。」

「分かればそれでよし。」

ともう裏のレインは出てこなかった。

レインはともかくペルマの家までのルートを再確認し、自分の帰路へと急いだのだった。

さてあれから何時間が経ったか…いや少なくとも12時間以上は経っていた。

なぜならもう陽は沈み、日にちが一日経ち、もうすぐ陽が昇りそうな気配を漂わせていた。

レインは夜中ずっと見張っていたが人という人が全く来なかった、むしろ犬っころ一匹すら来なかっただろう。



それでもレインは眠気覚ましのミントガムを味が完全に無くなるまで噛み続け、ライトがつくゲームを見張りながらひそかにやり続けていた。

そうやって時間を潰してもお目当てのマローネはやってこない。

寝ていない事も影響の一つだろうが、レインは少しイライラしていた。

「ペルマ…嘘付いたのか！？マローネなんか全くどこにもいやしないじゃないか！」

夜明け前まで待ったレインにとっては遅すぎた台詞だった。しかしそれも訳があった。

「でもなあ…やっぱりゲームやりすぎたかもしれない。どっかで見過ごしていたらどうしよう…」

と心配な部分もありペルマに文句をつけるには自信が無いのである。

レインは心配でゆっくりと頭の整理整頓を始めた。

ペルマの父親が帰ってくるのは見た、でもその後見たのは数人の人間。しかも働きにでたお父さん世代の男しか確認していない。

…いや、警戒を装って俺に分らない様に変装したのか？それでも俺はそんなに甘くは無い。すぐに気付くだろう。

では考えられるのはペルマの父親が帰ってくる前に贈り物を届ける作戦…いや、それはおかしい。

それならどうしてマローネは今日に限ってそんな早い時間にしたのか？何か不都合な事でもあったのか。それとも俺の存在に気付いたか。

後者は違うだろう、つまり可能性として考えられるのは前者か。ならばペルマが何とか一言言ってくれればいいものを…

もしかして元から今日は来てない？ペルマの証言によれば「よく届けられる」と言っただけで「毎日」とは言っていない。

つまり今日は贈り物休日？どうなのだろうか…やはり俺のミスだろ

うか？

どちらにしろ今日の徹夜は明日も続くのか？そうなるとそれはかなりの地獄だ…

レインはしばらくそんな想像を何回もグルグル回し、同じ内容でしばらく悩み浸っていた。

しかしそれを打ち破ったのは、表の徹夜と違い先ほど目を覚ました裏のレインだった。

裏は別の生き物なので、表の巻き沿いを食らって一緒に寝ない訳ではない。

裏は裏でしっかりと休養をとるのだ。そんな裏のレインが突如ボソリと言った。

「獲物を捕らえるときは無駄口叩かず、無駄な思想働かせず、その獲物だけを待つ。そして、見付けた獲物は本能で逃さない。」

いきなりだったので表のレインも一瞬驚いたが、すぐさま裏のレインの言う「獲物」を捕らえるため、体勢を整えた。

裏のレインは人より何倍も耳が冴える。それは今も発展途中であるろうか。

そんなレインの耳を信じ、もう一度マンションを見た。

そこには同じくらいの一人的少年がマンションに向かって歩いていった。

「マローネ・ベルカス…父親に顔がそっくりだな。」

レインはペルマにマローネの顔や姿の特徴を聞いていない。それはレインには自信があったからだ。

レインが頼りにしているのは、以前テレビに出ていたマローネの父親の顔だった。

「大富豪の幸せ生活」…か、そんな番組に出ていたベルカス公爵。その姿は絶対子に受け継がれている。

つまり、大富豪の人種ってというのは大体決まって、豪華な服、丸々

とした立派な顔立ちがお似合いなのだ。

そして今来たマローネ・ベルカスもそんな姿をしていた。まさしく父と同じ姿。

しかし人を見た目だけでは判断してはいけないのでレインはマローネと思われる人物が犯行に移るかどうかが調べた。

つまり、“ペルマのポストに何か贈り物を入れるのかどうか”と言う事だ。

それにしても…ペルマは「夜中の間」と言っていたが、まさか夜明け前に来るとはな…とレインは意表を突かれ少々驚いた。

その時だった、マローネがペルマのポストに何か大きなものを入れたのは。

「獲物遂に発見!!」

レインは急いで草むらから身を乗り出し、マンションへ一直線に走った。

マローネはそんなのに気付くわけも無く、ペルマのポストに贈り物を入れて立ち去ろうとしていた。

そしてマローネがマンション出口のドアから出た瞬間…!!

「マローネ・ベルカス覚悟お!!」

レインが正面からマローネを捕まえようと構えていた。しかしマローネがレインを見て、持っていたリュックサックから何かを出そうとしていたので、レインは咄嗟に身を引いた。

「なっ、何なんだね君は!？」

マローネは独特の喋り方でレインに問いかける。

しかしレインはそれに答えるよりもマローネがリュックから出した物に少々驚いていた。

「き…金属バット!? いや、それは言ってみれば“金バット”!？」

そう、マローネが出したのは金で出来ているバット…言ってみれば“金バット”である。

(おいおい…裏の俺が言っていた持ち物ってのは、このマローネの

だったのか…!?)

レインが金持ちの実力に手こずっている時、マローネは忠告する。  
「悪いけど捕まる訳には行かないんだね。大人しく下がりがたまえ！」  
しかしレインの闘争心はもはや燃え盛っていた。

「いやあー、同じ年に見下すような言い方されるとどーも腹が立つんだなあ。…どんなお坊ちゃまだか知りませんが俺、“表のレイン・カングクゼノス”が相手になりますわ。」

とレインは人差し指を突き立て、クイクイと動かしてマローネを挑発させた。「先に来いよ」ってトコロか。

マローネはその挑発に乗り金バットを真上に振り上げレインを叩こうとした。

「…?」

レインはその行動にある疑問を感じながら、姿勢を構えた。

「うおおおおお!!」

マローネは渾身の力を振り絞ってレインにバットを振り落とした。

しかしレインはその単調な攻撃に楽々と身を翻した。

コンッ…!

バットが地面に叩きつけられた音がした。その音を聞きレインはあ  
ることを確信した。そしてすぐさまそのバットを足で抑えた。

「そのバット、本当に純金製か?…いや違うな。」

「何を言うんだね君は?このバットの表面を見たまえ!金色に輝いているではないか!!」

マローネはレインの足からバットを抜き、今度はバットを横に振った。しかしレインも今度はバットを素手で受け止めた。

「そっか…そういうことか…君のバットは“表面だけ金”なんだね!じゃ、これはただの金箔か!!」

とレインは勢い良くバットを掴んだ。するとバットの表面の金がビリビリと破れていき、中から木のバットが見えた。



ナイフが地面に落ちる。

それを見てレインは溜め息を吐いた。そのナイフ、おままごに使うような鋭利でも何でもない“玩具のナイフ”であったのだから。

「チッ、心配した俺が馬鹿だった!!」

マローネもネタバレされたので何事もなかったかのように立ち上がった。

「やっぱり君にはバレてしまいましたか。誠に残念です。」

「いや、むしろバレない方がおかしいだろ。」

レインは冷静にツツこむ。するとマローネは急に壊れたかのように笑い始めた。そして笑い終えたかと思うところ一言言ったのだった。

「…ボクって本当に何やつても駄目な男だな、ハハッ。」

「何だ、自分で分かってんじゃねーか。なら、とっととそんな悪趣味な事やめたら…」

「でもね…諦め切れないんだよ!!」

突如マローネの口からハツキリとそんな言葉が出たが、レインは“ほおー”と言ってるかの如く口を開けた。

尚もマローネは話を続ける。

「ボクには彼女がいた。とても可愛くて性格も良くて、理想の女性だった。でも何故か彼女は突然ボクに別れを告げたんだ。何故だろうかボクは考えた、あげる物は沢山あげたし、彼女には色んな所に連れて行ってあげた…なのにどうしてか分からない。だから、もう一度やり直す意味を込めて彼女にプレゼントを届けているんだ。なのに君は“悪趣味”だなんて失礼…」

「はいはい、よく分かったからもういいよ。」

レインは面倒くさそうに話を切った。

「大体お前の話グダグダすぎ。しかも話はペルマ・ゲインズから聞いているからもういいんだって。…要するにもう結論は出た。ペルマがお前を振った理由を。」

「君にペルマさんの何が分かるって言うんだ!？」

「それはお前だよマローネ・ベルカス!!」

レインも負けじと声を張り上げマローネを指差しながらハッキリと言った。マローネは圧倒され一歩引いた。

「大富豪つてのは金の使い方だけでなく女の使い方もあるからないのか？お前は根本的に間違った野郎だな。いいか！大切なのは金じゃない、心なんだよ！…金が無いと何にもできないかもしれないが、相手を思いやる気持ちがあれば金も女も輝くんじゃねえのか？違うか？好きならもっとペルマを思いやれよ。プレゼントなんて回り込んだことせずにペルマに直接会いに行けよ！そして好きだとハッキリ言え!!」

そのレインの言葉にマローネは気付いたのかマローネは少し放心状態になりながらもこくりと頷いた。その目つきは先ほどのとは変わっていたのがレインには分かった。

そして次に言った一言も先ほどのマローネとは思えない一言だった。「…ありがとう、もう一度よく考えてみる。恋とは一体なんなのかってのを。」

「分かる奴じゃねえーか。…頑張れよ。」

レインもそれから何も言わず先ほど投げたバットを拾い上げ、マローネに渡した。マローネは木製バットと破れた金箔、玩具のナイフをリュックにしまうとマンションを後にした。

それを見届けていたレイン、だがある事が気になっていたのだからそれを聞いてみた。

「あつ、ところでマローネ！お前さんのリュックには他に何が入っているんだ？」

「えっ？ピッキング用のセットとあと…なんかあった時の遺書みたいな物かな？」

これで裏のレインが言っていた事は半分あっていたかな？と表のレインは思いながらマローネに手を振ったのだった。

それから依頼を済ませたレインもその後荷物をまとめ、家に帰ったのだった…

「…という訳。ふわあああ…」

レインは寝ていない為欠伸を連発しながらペルマに喋っていた。あれから数時間経った学校の休み時間であるのだからレインは寝る暇さえない。

「寝不足で死なない様に」ペルマの忠告は見事に無視されていたのだった。

「…私の別れた理由、よく分かったわね。」

「ヤマ勘だ、心配するな。ああ、それと…マローネには何て言うつもりなんだ？」

レインは必死に目を擦りペルマに尋ねた。ペルマはうーん…と考えるこた答えた。

「依頼以外のことは追求しないのがお仕事ではなくって？」

「まあ…それもそうだな。ともかく依頼は成功したし、加入決定な。」

とレインはペルマに手を差し伸べる。ペルマは微笑みながら躊躇うことなく握手した。

（レイン君…朝見ていたけど、なかなかあの台詞はカッコ良かったと思うわ。）

…これが、加入に戸惑わないペルマの理由だとはレインは知る由も無かった。

こうして「なんでも部（仮）」の一步を踏み出したのだった。

依頼No.2に続く



## 依頼 No. 2 (前)

春の青空が広がっていた。水色の綺麗な青空である。雲が少々漂っているが今日は快晴である。

その雲は自由に空を駆け巡り、とても心地良さそうであった。

ここは中学校より少し離れた大通り。この町では数少ない大通りの一つで、真っ直ぐに続いている為、この道はどこまでも続いているようだ。

それに沿って走る自動車は平日の午前中なのでそれ程多くなかったが、少なくともなかった。

そして現代的な建物が立ち並ぶ大通り。その大通りには沢山の人で賑わっていた。

その中心的年代と言えばやはり十代や二十代の若者達である。皆、最新の物を求め、街中を彷徨うのだ。

そんな中に中学の制服を着ている男女カップルがいた。

この大通りには中学の制服を着た人もカップルも珍しくも無い。

ましてや、ここは一種のデートスポットでもあるので、カップルなんか普通なのだ。

その中でもあるカップルが目立って街中を歩いていた。

「エルダー、大丈夫？」

と声を掛けた彼女。彼女の隣には「エルダー」と呼ばれた彼氏がいたが、エルダーは手に沢山の荷物を抱えている。

袋には名の知れたブランド名が書かれていた。どれも服に関連するブランド名だ。しかも全て女物。

つまり彼は彼女の荷物を持つてる。そんなことは男として、彼氏として当たり前前の行為なのだが。

それにしても…よくぞここまで買ったと思わせるような量。流石の彼も少々苦しそうだ。

それを案じてか、彼女が心配してる。しかし彼は笑顔で答える。

「心配ないさこれぐらい軽いものよ！」

しかしその笑顔は一瞬にして苦笑に変わり、だんだん笑いも消えてくる。

「もうお昼だし、とりあえずあそこのお店でご飯食べて一休みしない？」

と彼女が気を遣ってか、そう提案する。彼を気遣ってるぐらいなら、そこまで荷物を持ってあげればいいのに、と思ってしまうような光景である。

まあ彼もそんな事は好きな彼女に対しては言うことなく、その提案に乗った。

…いや、もう今の状態では「従った」の方が正しい表現か。

2人は彼女が提案したファーストフード店に寄った。そして仲良く注文して、仲良く昼食をとった。

荷物を下ろして喋る二人は、先ほどの荷物なんか何事も無かったかの様に、とても楽しそうなラブラブカップルの顔に戻っていた。

午後、2人は荷物を「お荷物預かり所」の様な所で預けて（その時は彼女が預かり料を支払ってくれた）、その後映画館へと足を運んだ。

そして彼女が話題にしていた映画を見て、帰りのゲームセンターでプリクラを撮ったり、UFOキャッチャーで遊んだり…

彼にとつては午前よりも全然楽しい午後となったのだ。

「じゃーね、エルダー！楽しかったよ」

「俺もだよ、テト！また明後日学校でね！」

と2人は楽しかった今日の1日と、お互いに惜しみながらも別れを告げたのだった…

その2日後の月曜の朝だった。

「えー！嘘お！？」

「マジで！？この2人が？これまた意外だねえ〜。」

「でも超ラブラブじゃん。」

とある教室に様々な声が響く。どうやら誰かのカップル話のようである。みんなその情報に驚いている。

そんな教室に到着したのはテトの彼氏、エルダー。

「みんなおはよう。」

その声が合図で、彼の前にすぐに人だかりが出来た。そしてみんなは口々に喋る。

何が何だか分からない彼は混乱状態に陥っていた。しかし、みんなの口からは共通した言葉が出ているのに何とか気付いた。

「テトちゃんか…」

「テトちゃんって…」

そう、エルダーの彼女の名前。何故彼女の名前が出てる！？しかも俺の彼女だと知っている喋り方…一体これは？

すると彼の親友がその間を潜って彼の耳元まで近づきこう答えた。

「お前はやられたのさ、例のアイツにな。」

「例のアイツ」。この言葉で彼の混乱は完全に解けた。だからみんなは俺とテトの付き合いを知っているんだな…！

となると、アイツを証明するアレがこの教室内に存在する筈だ！

彼は早速喋りかける人混みを掻き分け、教室を一望した。そしてそれはすぐに彼の目に留まった。

それは後ろの掲示板だった。普段は大小様々な掲示物があるのだが、生憎新学年のスタートの為そんなに掲示物が多くなかった。

だからすぐに見つかった訳だ。いや…わざと見付けやすいところに貼ったのが相手の策略か。

彼は自分が入った教室の入り口から早歩きで後ろに向かった。鞆も置かず、目線の先にはソレしかなかった。

そしてそれを近くで見えてみた彼は驚きを隠せず、鞆をボトンと落とした。

それは無理もない。何故なら彼の一昨日の主な行動の全てが写真として撮られていたからだ。

そう、テトと買い物をしているところ、昼食をとっているところ、

勿論その時のお互いの万遍無い笑みも写っている。

流石に映画館のシーンは無かったが、ゲームセンターの写真も撮られている。

10枚程だろうか、掲示板にバラバラに貼ってあったのだ。

それを見た彼の握っていた拳は震えていた。恐怖にはない、怒りにだ。

「まさか…とは思っていたが、新学期早々に現れたな。例のアイツめが…!!」

そして写真を全て剥がし取って粉々に破って捨てたのだ。しかしもう遅い。

写真はバラバラでも、人の心にある写真の記憶はバラバラには出来ないのだから…

「という訳なんだが、お願いできないかなあ？」

「えっ…しかし、こんなボクじゃお役には立てないと思いますよ。」  
砕けた頼み方に対して、とても丁寧な断り方。一体誰の会話なのだろうと思わせる。

ここは1年1組の教室、時は「エルダー」の素性がバレた月曜の三日前、つまり金曜日だ。

しかしそんな予感なんぞ全くする訳もない…というかそもそも「エルダー」とは誰か、入学したばかりの1年生には知る由もないだろう。

そんな二人が何かの頼みごとについて話していた。…もう少し話を聞いてみよう。

「別にそんな事は一切無いよ。まあちよいとベルカス家の無駄なお金をせめて友好的に使ってあげようかなと思って言ってるのに…」

「どういう事だね、レイン君？」

「まあ予定としては、この“なんでも部”はその名の通り何でもする訳だから、色んな所に行かなくてはならない。その度に交通機関が必要だ。だからマローネの家来か何かでそれを補いたい訳。どう

だ？良い案だろ！」

と淡々と説明するレインと呼ばれた少年。しかしまだマローネという少年は納得していない。

「でっ、でもですね…」

「あーあ、折角のペルマちゃんも一緒に部活ができるのに勿体無いなあ。まっ、仕方無いつか！」

「あゝっ、ちよ、ちよっと待ってくれぬかレイン君」

「ってな訳でOKを貰ったぞ。」

「戯け、ペルマという人質付きだろ。表のお前さんもロクな事を考え始めたモンだ。」

「いやいや、指図したのは君じゃないか、裏のレイン君」

「いや、俺には俺なりの計画があるんだよ。まっ、余計な口出しはせぬ事だな。」

「でもどーせ俺も誘うつもりでペルマを出したから、ある意味五分五分だね。」

「へー、さいですかあー。っと以上。」

とここで会話が切れる。“性格の分岐点”での会話、いや口論が終了したのだ。

以前にも言ってる通り、ここは表と裏のレインが唯一喋れる場所となってる所である。

話していた内容とは先ほどレインが新たに“なんでも部”に勧誘していたマローネ・ベルカスの事。勧誘にペルマを用いた事が本当の主題か…

しかし先ほどもレインが話していたが、マローネは今後レインたちの裏で活躍することだろうと思われる。

へんてこりんな道具を貰うより、何か得になるような事に使えばいい。マローネとの戦闘（？）後にレインは自分なりにそう解釈したのだ。

しかし、“マローネは利用されてる”という解釈をとっても意味は

一緒のように思えるが…まあそれはさておき。

見事に二人目の勧誘に成功したレイン。残りは三人。

そのレインはマローネの勧誘を終え、自分のクラスに帰っている途中だった。

休み時間という事もあって中学1年生は元気に廊下やベランダを走り回っている。まさに小学生気分をそのまま持ち込んだ感じである。レインはその様子を特に考えることなく、それを眺めながらゆっくりと廊下を歩いていた。

しかしそれを見ていた為、レインは前を見ておらずまんまと前を歩いていた人にぶつかつたのだ。

レインはゆっくり歩いていたのでぶつかりはしたが、軽く下がっただけで転んだりはしなかった。それは相手の少年にとっても同じだった。

「あつ、すみません。」

レインは軽く謝った。何せここにいるのはみんな同級生であると思つたからである。

しかし、それは大きな予想ハズレであった。

実を言えばこの学校の制服はみんな同じで学年毎に違った特徴を持つている訳ではない。なので学年を間違える事は日常茶飯事なのだ。しかし今回は不味かつた。その相手が先輩で、しかも物凄く不機嫌だったから…

レインは謝つた後にその顔を見て怒っている事を確認したので、それまでは何も気付かなかつた。

その男は運動系の部活をしているらしく体は少々頑丈そうである。唯一特徴的なのはズボンのベルトが少し派手ということぐらいか。レインはまだこの時点で先輩だという事もまだ分かっていなかった。すると向こうの男の先輩がドスを効かせた声でこう言った。

「おい、どこ見て歩いてんだ!? お前の目はどこについてんだよ!」  
するとレインは先輩だと知らずに堂々と言い返した。

「ちゃんと前についてますよ。余所見をしていて前を見ていなかった

た俺の不注意です。すみません。」

レインはもう一度、今度はしっかりと謝った、表のレインが善意を込めて。

しかし男の機嫌は良くなった感じはしない、と顔の表情から読み取れる。そしてその喋り方も少し荒くなった。

「この野郎…丁寧に言う所が余計にむしろくしゃりするんだよ!!」  
それに対してレインは淡々と冷静に言い返した。

「それってただの八つ当たりじゃない。」  
「黙れっ!!」

その様子はまるで“優等生”と“馬鹿”の言い争いだ。しかし立場は先輩・後輩の視点から見て真逆である。

すると男は突如レインの襟を掴んで締め上げた。力は結構あるようだ。

レインはしばらく足をバタつかせていたが、顔に苦悶の表情は無かった。まるでこの状況においてレインがピンチではないかの様に見える。

周りの人たちも二人の騒動を呆然と見たり、野次馬が入ってきたり…となっていた。

学校生活数日でこんな騒動が起こるといっなのは新一年生にとっては面白い事なんだろう。

するとしばらくして男はレインを「フンッ」と乱暴に離してその場を去った。次の授業のチャイムが鳴ったのだ。

周囲の野次馬達も面白く無さそうな顔をして自分達の教室に帰っていった。

野次馬としてはもっと大きな騒動、喧嘩沙汰になる事を期待していたのかもしれない。

レインはその時に見た、そのぶつかってきた男が二年生の教室に向かって行ってるのを。

そこで初めてレインはその男が“先輩”だと分かったのだ。

しかしレインにとって先輩だろうと関係無さそうだと言わんばかり

に颯爽と教室に帰っていった。

さっきのピンチの時における余裕の表情といい、今の興味無さそうな顔：あまり恐怖とも感じていなかったみたいである。

さて、授業は至って真剣なレイン。シャーペンをくるくると指先で器用に回している。いかにも「頭の良さそうな人の仕草」っぽい。実際のところ、そんな仕草で人の頭の良さ・悪さを判断するわけではないが。

すると、頭の中で誰かが…と言ったら裏のレインしかないのだが、話しかけてきた。

「このクラスの一番前にいる女子とその仲良しの女子が、さつき妙な噂をしていた。」

「へえー、俺に対する噂かな？」

「そんな下らない物ではない。今後の君のストーリーの展開に繋がるお話だ。」

何か意味深な事を頭の中で口走った裏のレイン。こんな事は以前まで滅多に無かったのに、何故だろうか。と表のレインは不思議に思った。

「何だ？まるでこの先の展開を知ってるような口調じゃねえーか。」

「俺はお前を知らない、それと同じでお前は俺を知らない。だから知らなくていいのだ。」

「はいはい。じゃあ素直に君の言うとおりに作業をこなしていくことにしよう。」

今の話は勿論“性格の分岐点”上での話なので授業には全く影響を及ぼさない。

ただその時のレインの神経はどこかに行ってるかもしれないが…

授業後、レインは急いでその女子に駆け寄った。休み時間は少ないので出来るだけ情報を貰いたいのだ。

丁度その時、その少女の友達も来ていたので都合が良かった。

「ねえねえ！ちょっと話したいことがあるんだけどいいかな？」と



レインは切り出した。

そして裏のレインから聞いた、先ほど少女達が話していた噂の内容を少しだけ切り出してみた。

最初、それを聞いた少女2人は、

「レイン君って地獄耳ね。」

と言われたが、その後はその噂の内容を詳しく教えてもらった

「それはこの学校にいる伝説のカメラマンであり現在もこの学校にいる。その正体は勿論、学年ですら不明。しかし日は日程だが、必ず1ヶ月に2回という決まった回数で出現している。主に何を撮っているのかと言うと、何故か恋人情報ばかりである。それはまるで週刊誌のカメラマンのような人間である。そして恋人達のラブラブしている写真を大量に撮り、次の朝に教室後方の掲示板に貼られるという。それからもう一つ、確かな情報がある。それは…」

「必ず撮る場所はこの大通りの一番大きい、このシヨッピングモール付近である事。」

とレインは大通りの中一人そう呟いた。そうレインはあの2人にその情報を聞いて、授業が終わるとすぐにここに来たのだ。

今日はまだ新学期が始まって色々忙しいため今日は特別にまた4時間授業だったのだ。

そしてレインはペルマもマローネも誘うことなくここに来た。

マローネは入ったばかりなのでもかく、ペルマはレインが授業後、早々と出発しようとしていたのを見て、レインに今日の仕事が無いが尋ねていた。

「ああ、今日は俺が用事があって…って言うか、今日は仕事のお誘いは来なかったよ。」

と言っておいたが少々わざとらしい感じもしてしまった。しかし、それでもペルマは納得したので、レインにはついては来なかった。なので今日の勧誘の仕事もレイン1人。まだレインにとっては単独行動のほうが身軽でしやすいと感じている。

しかし1人つてもものなかなか痛いものがあった。

この大通りにいるのは必ず2人以上、つまり友達やカップル。その人たちのお陰で、この通りも大いに賑わっているのだ。

しかも同じ10代の少年少女もつろつろしている。こんな中に立っていたら「寂しい男」に見間違えられるのは当然だ。

(あー、早く探すだけ探して居なければ帰ろつ。)

レインはぶらぶらとほろつき歩きながらそう思っていた。しかしそれに對してお腹は素直であった。

グッッ…

レインは何も言わず、ただ進路をファーストフード店に変えて今度はちゃんと進み始めた。

レインはこの大通りは小学校の時に何度か通った事があるので、自分の好きなファーストフード店の居場所は大体分かっていて。

しかし、その時レインは発見したのだ。自分と同じファーストフード店に入ろうとする踊呪中学校のカップルを…!!

その証拠は一目瞭然。男と女の来ている制服が自分と来ている制服と一致。間違いなく踊呪中学校の生徒で、なおかつカップルである。

しかも男の方はレインにとって見覚えのある人物だったのだ。今は彼女の荷物を持つてる所か…かなりブランド品が揃っている。

一体これまでにどれだけ買い物をしたのか。

しかしその頑丈そうな体にとっては大丈夫そうであった。そして、距離が少々離れていようと派手なベルトが目につく男…

そう、それは今日の休み時間にレインとぶつかって、レインを締め上げようとした2年生の先輩である。

「何だ、あいつ付き合っていたのか。こりゃいいや!」

やはりさっきの事には少々キレ気味だったのか、と思わせる口調。

しかし、これは“裏のレイン”の声である。

実際表のレインはそんなに表情を変えていない。そしてそそくさと尾行を開始したのだ。

「何イライラしてんだ?まさかまだあの締め上げた先輩にキレてるのか?あんな奴俺が…」

「うん、分かってるんだけど…何か少々引かかる物があつてね。

それと腹が減つたのもある。まあ、ともかく例の“伝説のカメラマ

ン”がつけているかもしれない。：周辺に怪しい人物いない？”

「大正解。もう一人、誰かが尾行をしている。」

「なあーんだ、当たりか。どうやら俺もつくづく運が良いみたいだな。」

そして2人がファーストフード店に入ってしまった。これなら尾行している者の足も止まるだろう。

そしてレインは行動を開始した。裏が素早く表のレインに居場所を教える。それに合わせ表のレインも素早く、人に怪しまれずに闇に潜んだ：

「……」

そいつは無言でただ写真を撮っていた。レンズの先に見えるのは中学生のカップル。

それを何も考える事無く、無心で写真を撮り続けた。これがそいつにとって当たり前なのだ。

何かを考えると人目に付かない所でも人目に付いてしまう危険性があるからである。

春の青空、白い雲、大通りは今日も平日にも関わらず大勢の若者で賑わっていた。

しかしそいつは全く逆の所にいた。春の青空も、白い雲も見えない、裏通り。

表通りよりもはるかに暗く、ジメジメしていて、誰にも気付かれな

い：いや気付かない場所である。

そこでそいつは写真を撮っていたのだ。いつも通りピントを合わせてシャッターを押す。カシャとカメラのシャッターが切れる音がする。

そいつはその音を聞きたび、自分が写真を撮れる喜びを味わうのだ

…しかし、その時だった！」

そいつはある者に気づき、カメラを手から離し、首にぶら下げた状

態でその場から即座に離れた。誰かが来たのだ。

「こんな所にいちやあ誰も気付きはせんわ。なあ“伝説のカメラマン”さんよお！」

それは一人の少年だった。制服がまだ真新しい。そしてその制服は踊祝中学の制服。どうやら自分より年下のようである。

あと、目立つた特徴と言ったら眼帯ぐらいであろうか。目にどのような怪我をしたのかしらないが痛々しい様子が見られる。

しかし反対の目は、何にか自信に溢れた目をしている。私を見つけただからだろうか…

いや、それはともかくどうして私が見つかったのか？いつも通りに仕事をこなしていたはずなのに何故…

しかも私の情報を少しは掴んでいる…これは私の人生の中でも“要注意人物”ってところか。

レインはそいつの顔をまだ見ていない。いや見えないのだ。

明るい表通りに目が慣れてしまつてのだろうか。暗い裏通りにいるそいつの姿をはつきりと見ることは出来ない。

しかも姿を隠すためフードらしきものですっぽりと顔を隠しているらしい。辛うじて口元が見える…これじゃあ空想上の「魔道士」だ。そして写真を撮るためのカメラも見えている。

「人とお喋りするときは姿をちゃんと見せないと話せないじゃないかあ。さあフードを外しな。」

レインはそう言ったが相手は答えてくれない。声が聞こえないのだろうか？いや、こんな人の気配がしない裏通りで聞こえないハズが無い。

それとも、他に何か事情でもあるのだろうか？例えばそいつがただの操られし「ロボット」であるとか？

まさかっ！？レインは何を思ったのか、いきなり正面から走ってそいつに近づいた。距離は数メートルあったのにも関わらずレインは

一瞬で近づいた。

そのスピードは結構な速さだった。そしてレインはそいつのフードを自分で取るうとした。

しかしそいつも咄嗟に避けた。しかし避けた瞬間にそこで風が生まれる。そしてその風がフードを揺らした。

レインは間近にいたので風になびいたフードの間から顔が見えた。

しかし予想だにしなかった顔を見てレインは驚いた。またフードの間から除いた顔もレインの顔を見て驚いていた。

即座にレインはその場から一步下がった。自分のスピードにある程度ついて来れるのはなかなかの者だと感じ距離を置いたのだ。

それは相手にとっても一緒か。この場所を見つけた時点で俺を尋常な者とは見なしていないだろう。

するとそいつは顔を見られてしまったので仕方ない様な仕草でフードを外した。

レインはその顔を改めて確認した。

間違いない、あれは女性だ。

しかもロボットでも何でもない人間だ。

自分の予想が外れ、ちよつとガツカリしていたが、相手が女性なら表のレインにとっては話は別格になってしまう。

しかし…あの子は自分より年上の様だ。なかなか華奢な顔立ちであり、一言なら「美しい」と言うべきか。

さつきかなりタメ口だったなあー。とか、ちよつと乱暴だったかなあー。と表のレインは考えていた。

しかし裏のレインは何も考えて無かった。そんな女好きな表のレインは当たり前だし、そんなのに口出したって意味が無い。

そもそも“裏のレイン”は女好きでも何でもないので美しい女性がいたとしても無反応なのだ。

表のレインが色々と考えてる時、相手は遂に喋った。

「誰だか知らないが何故私がおりにいると分かった？」

レインはその質問に対して丁寧な答えた。

「私はレイン・カンダクゼノスと申します。どうぞお見知りおきを。貴女のお名前は？」

まるで紳士の様な態度の様だが、質問にも答えてないし、少々おフザケが過ぎているような気もしてくる。

相手も急に態度を変えたレインに敵対心を向けてる気がする。

「まあいいわ。私の正体を見たからには私も自己紹介をしとかなくちゃね。私の名前はクローナ・アンドリユーよ。」

クローナちゃんかあ…とまたレインが想いを馳せていて鼻の下が伸びた様な顔をしていたので、クローナはその態度にイライラしていた。

「私を見つけたからっていい気になんないでね。私は絶対に捕まらないんだから。」

「貴女を捕まえる？何を言っているのですか、私は警察じゃあるまいし。」

「じゃあレイン君は何しにここに来たの？私を恥さらしにする為？」  
「そうでも無いんだな…」

と言いながらレインは胸元のポケットから一枚の紙を取り出した。

そしてそれをクローナに近づき渡した。

クローナはその行動に少々警戒心を持ちながらもその紙を受け取った。

紙にはそんな怪しい仕掛けは無いだろうと思いつつもクローナは慎重に紙を開けた。すると中には数行の文章が書いてあった。

『なんでも部（仮）…名前の通り、何でもする部活…』

その文章は先日ペルマに見せた“なんでも部”の紹介文だった。クローナはレインが自分に部活動誘をしていることに驚きながらも文章を読んでいた。

「ターゲットはウチの踊呪中学校だから、きっと君も踊呪中学の八ズです。そして多分何か部活にも入ってないだろうと思う。…私の読みは少々浅はかでしたかな？まあそれはともかく、君みたいないな力メラマンが私の部活には必要なんだ。やっぱりそれだけ情報通だし

ウチの部活にはもってこ」

「断るわ。」

やっぱり「貴女」は、気持ち悪いかなと思いいレインは「君」に変えていつの間にか喋り変えていた。

そんなレインの説明途中にクローナは即座に断った。しかしレインの表情は依然変わらない。

「それは何故ですか？君が踊呪中学の人じゃないからですか？それとも何か部活に入っているからですか？」

「私はその中学にしる、何か部活に入ってるにしるレイン君には関係ないわ。ただ私はこの仕事…って言うっちゃ変だけど、誰かの為に撮ってる訳じゃないの。…誰かの為に写真は撮らない。私は私自身の為に写真を撮るのよ。」

レインはふむふむと頷きクローナの話を聞き入れた様にも思えた。

しかし…！

「そうか…ならばっ…！」

とレインはその場から消えたのだ！戸惑うクローナ。レインは一体どこ…？

すると一瞬でレインはクローナの目の前に出てきた。クローナはその一瞬の出来事に戸惑い、避けようと身体を避ける事が出来なかった。

「…ッ…！」

レインの手が出てくる、クローナは思わず目を瞑ってしまった。これではレインの思惑通りではないか。

そうしたくないと意識するクローナ、しかし反射的に動かなくなってしまうクローナ自身。

しかしレインの行動は違っていた。

目を瞑っている間に手元にあった何かを抜き取られた。そしてその後は何も起こらなかった。

手元にあったのは“なんでも部”勧誘の為の紙。レインはただその紙を抜き取っただけに過ぎない。



しかし、その間に起こった出来事は僅か1秒程。あまりにも速すぎる行動にクローナは啞然とするしかなかった。

「ちよつとビビらしてみただけさ。さて…帰る前に一つ聞かせてくれ。何故撮る場所は毎回この大通りなんだ？」

「そんなの…あんたの知つたこつちやないわよ。」

クローナは先ほどのレインの勢いに飲み込まれ、その場で少々息が切れていた。

そのお陰で今のクローナの言葉も

「ハア…ハア…」

と言いながら喋っていたが、その言葉ははつきりしていた。そして言葉を続ける。

「私も…最後に一つだけ言わせてちょうだい。」

クローナはそこで息をゆっくり吸って吐いて、呼吸を整えた。

「この件は御互い無かつた事にしない？私が見つかったことも、私に勧誘した事もね。」

「別に構わないよ。でも名前だけはちゃんと頭の中に残しておくつもりだけだ。」

「私もあんたみたいなの奴は忘れられないね。それじゃあな！」

そうしてクローナはまた闇にへと去っていった。きつとさっきの力ツプルの撮り直しか。

レインもひと段落終えたので闇から光の当たる場所へと戻り、家へと帰っていったのだ。

「表のレイン、忘れるな。決して自分が尾行をしてる者だとしても、時に尾行される者になるのだ。後ろを取られたらそれで御終いなんだよ。」

裏のレインの奇妙な一言を残して…

2日後の月曜の朝、レインは例の“派手ベルトの先輩”のクラスに朝早くから寄ってみた。その時はペルマも一緒にいる。

何と無く探りを入れていたのでクラスは大体分かっていた。そして

教室を除く。

「レイン君、どうしたの？急に2年の教室をを覗くなんて…」  
ペルマには昨日の説明は一切していない。そしてこれからも話さないつもりでレインはいる。

そんなかなで訳も分からずここについてきたペルマ。傍から見たら先輩に知り合いでもいるのか、それともただの野次馬なのかと疑われる。

レインは後者の方だ。それでも教室のある所を覗きたかったのだ。

それは教室の後方の掲示板である。レインの予想通り、何かの写真が貼ってある。

「えっ！？何アレ…！！」

「これがウチの学校の名物であり、伝説である写真の1部でえーす

とレインは少々フザけた感じでペルマに説明した。伝説のカメラマンの噂を…

しかし傍かも噂を聞いただけの者として振舞っただけで、クローナとの接触の話なんぞ一切無い。

それでもペルマは十分驚いていた。学校内にそんな人物がいたなんて…だがペルマはそれ以上に感じる物があった。

「でもそんな事しちゃ、この学校ではお付き合いが出来ないじゃない！！余りにも酷すぎるわ！！」

しかしレインは教室内の掲示板に貼ってある写真と、それを取り巻くギャラリィ達を見ながら冷静に言った。

「可笑しい話だ…何故付き合うことを隠さなくてはならない？オメ  
デタイ事なのにわざわざ隠す人間って変だよな。いいじゃねーか、  
この“伝説のカメラマン”は良い仕事してるぜ。みんなに祝つても  
らおうと日々情報を集め頑張ってるんだからな。」

ペルマの話に少々笑いながら皮肉った意見を付け足したレイン。ペルマもそれには反論しづらかった。

「でっ…でもそれならちゃんと本人達に許可をとって…」

「そんなんなら余計に撮らせてくれないじゃないか。だから自分の身を隠してとってんじゃねーの？俺には分からない話だけだよ。」  
それにはペルマは黙りこくってしまった。ちょうどその時だった。

「おつと主役の王子様の登場だ。」

その通り現れたのは昨日撮られていた“派手ベルトの男”である。  
今日もベルトは間違いなく派手だ。

「みんなおはよう。」

男の声に反応して、すぐに人が集まった。そしてまるで彼が有名タレントの取材を受けているかの如く口々に質問されている。

彼はしばらくとまどった顔をしていたが、次第に顔色を変えてきた。そして急に教室を見渡し、後ろにある写真を見つけそこに向かい、鞆も置かずに早歩きで近づいた。

そして見つけたのだ。彼が彼女と一緒に撮られている写真を。

彼はそれをしばし見た後、拳を震わせてこう言った。

「まさか…とは思っていたが、新学期早々に現れたな。例のアイツめが…！！」

そして写真を粉々に破り捨てていった。何とも情けない姿、とレインは思った。

それはさっきまで周りにいたクラスの人もそう思っているだろう。  
ここまで必死になるのもなかなかあー…って感じの顔だった。

「誰かの為に写真は撮らない。私は私自身の為に写真を撮る。」  
か…」

そう言いながらレインはペルマを連れ、自分の教室に帰ったのだっ  
た…

- 依頼 No. 3 に続く -

## 依頼 No. 3 (前)

「クソツタレツッ!」

踊祝中学校2年生の教室に少年の空しき声が響き渡っていた。

しかしその声はざわめきに消されてしまう。少年を囓り立てる声によって…

「ペルマ、帰るぞ。もうすぐ授業が始まる。」

叫んでいる少年を心配そうな目で見ていたペルマ、しかしレインは催促する。

レインにとってはこの男がどうなるうとも、いい気味であるのに変わりはないのだから、これを長々しく見たって何の得にもならないむしろ、これ以上見ると後でまた睨まれる可能性があるので早く帰るに越した事はない。

しかしペルマはまだ留まってグチグチと言っている。…レインにはそのようにしか聞こえない。

「レイン君：私、やっぱり分からないよ。ここまでして写真を撮りたい意味なんかあるのかなんて…」

「俺だつて分かる筈ないさ。そして”伝説のカメラマン”がどんな奴なのか知らないから、責めようも無いじゃないか。ほら帰るぞ。」

「うん…」

こうしてレインとペルマは自分の教室、1年3組に帰るのだった。

教室へ帰る道に人の姿はあまり無かった。まだ学校に慣れてない1年の生徒達は教室で、まだ同じ学校の友達とお喋りでもしているのだろうか。

そしてこの数日で他校生とコミュニケーションをとろうとする奴はよっぱどの積極的な人間だろう。

しかし生憎この学校にはそんな行動をしているのはレイン1人くらい。

だから1年生はさほど廊下には出ない。そして人気も無くなる。そんな戻り道の廊下でだった。

レインとペルマは黙りこくって歩いていた。あそこまで言ったペルマにレインは何も声を掛ける術を無くしてしまったのだ。

そしていつの間にかレインは歩調を遅くして、ペルマと少々距離をとって歩いていた。

この時点で変な関係に見られたくないの、なるべく「赤の他人」という気分で歩いていた。

そんな事してもこの廊下にいるのは俺とペルマしかないのにな…そう思いながらレインは3組に向かって歩いて行く。

そうしていると、ペルマも少し歩調を早くしてみたようだ。距離がどんどん離されていくのを感じる。

…もうすぐ1年3組。レインがほっと一息撫で下ろしたその時だった。

「…!!!」

咄嗟にレインはしゃがんだ。何かが頭の上を掠めた…拳だ。誰かが後ろからレインを殴ってきたのだ。

レインは瞬時に自分の手を上に上げて、その腕を掴もうとしたが拳は既に引かれていて、拳の持ち主もレインと距離をとっていた。

ペルマはその事態に気付くと、急いでそこから身を引き教室のドアに隠れる。

「後ろから殴ってくる奴なんぞ、卑怯者の雑魚にしか限らねえ。違うか？」

とレインは相手の顔を見る。しかしその姿にまずは驚いた。

「おっと失礼。手が勝手に動いてしまったのです。」

レインはその声に更に驚き、警戒心を強めた。

(声までも変声してるのか…なかなか侮れないか、コイツ。)

そう、声はヘリウムガスを吸った様な、テレビでよくプライバシー保護のためにしてる声に似ていた。しかし変なのは声だけでなかつ

た。

服装は中学校の制服。ズボンははいてるって事は男の様である。そしてそれに加え黒いマントを着ている。さらに顔は真っ白い仮面に隠れている。目元・鼻に穴は開いているもののそれだけでは容貌は分からない。

これじゃあまるでどこかの怪人だな…とレインは思った。そして再びその者に話しかける。

「…くだらない変装だ。目的は何だ？」

「話は手っ取り早い方がいいですね。ではお話ししましょう。本日の放課後4時において、あなたを体育館の裏にご招待します。必ずお越し下さい。」

そこでレインの眉がぴくつ、と動く。体育館の裏となると…

「そこで愛の告白でもするつもりか？」

「余裕をかましてるのも今のうちですよ。必ずお越し下さいね。」そしてマントを翻し男は喋り続ける。

「それと、この事は決して口外なさないで下さい。もしも…の事があればあなたを殺すつもりです。それと集合場所に約束の時間に来ない事も一緒ですからね。私はいつでもあなたの事を見ているので…」

「気持ち悪い。心配するな俺は約束はちゃんと守る男だぜ。まあ男性の約束はビミョーだな。」

「そうですね…ではあちらのお嬢さんにも口外なさないように伝えといてください。それとあのお嬢さんはご招待していませんのであなた様お一人でお越し下さいね。」

その男は顔だけペルマの方を向きながら喋った。ペルマはその仮面に怯え、後ずさりをする。

「分かった。ちなみにお前の名は？」

「闇夜の使者」でも言つときましようか。それではお待ち」

「お待ちしています」と言つてその場を終わらせようとしたのだろ

う。しかしレインがそこを遮った。

「しかしよおー、闇夜の使者さん。そんな事するより、今ここで俺と勝負しようぜ。それの方が手っ取り早い！」

レインは手をポキポキと鳴らし、構えに入る。やる気はもう十分の様である。しかし闇夜の使者は冷静にその場を対処する。

「そんな事はさせませんよ。」

すると半歩横に足を動かしたかと思うといきなり颯爽と、反面不気味に動いて突如廊下から窓の外に飛び出した。

1発目に入ろう間合いを詰めようとしたレインは勿論、ペルマも驚きその窓へ走る。

何せここは3階なのだからここから落ちるなんて命知らずにも程がある。

そして2人は窓の外を見る。春の青空が広がり、下にある運動場も黄土色の土を綺麗に見せている。

しかし、どこを見ても闇夜の使者の姿は無かった。

「消えたの！？そんな…漫画じゃあるまいし。」

ペルマは動揺していた。しかしレインはさっきの状態から冷静沈着な状態に戻っていた。そしてゆっくりと下を覗かせていた。

「トリックは？」

「余裕、極まりなし。」

ペルマは闇夜の使者に多少の焦りを見せている、とレインは1時間目の授業からそう推測した。

いや、ペルマが何かそわそわして焦っているのは一目瞭然なのだ。だから「推測」というか「確実」なのだろう。

しかし、レインは逆にあんな事があったのに冷静である。

ペルマがそのレインの余裕さに疑問を持ったのはようやく自分が落ち着き、自分以外の人間を考えられるようになった昼休みであった。

あの初日の不思議な行動が吉と出たのか、レインは数日で色々な人

と仲良くなっていたので、昼飯も賑やかに大勢で賑わっていた。  
この学校では昼食の時は好きな人同士でくっついて食べていいとい  
う仕組みなのだ。

「へえー！レイン、また面白い話聞かせてくれよ！」

「分かった！また明日も面白い話題用意して待つとくよ！」

とそれぞれ人は机や椅子を元に戻していく。それと同時にペルマが  
近づいてきた。それを見てレインが喋りだす。

「この昼食の仕組みって何とも無様だよな。だって好きなもの同士  
ならばずといていいほどに仲間はずれの1人ぼっちで飯を食う奴  
がいる。そしたらそいつはイジメの対象物になりやすいに決まっ  
てるじゃないか。」

レインは近づいてくるペルマにそう言った。ペルマもレインの机の  
前まで来ると、机に両手を置き言い返す。

「じゃあ人気者のあなたが誘えばいいじゃない。」

「それが出来ないんだな。そしたらみんなが”何でこんな奴を誘っ  
たんだ？”ってなって余計にその子がかわうそ（かわいそう）じゃ  
ねえーか。」

それを聞いてペルマは大きく溜め息を吐き、さらに言い返す。

「そーゆー傍観者がいるからイジメは絶えないんだよ。あなたが誘  
つても別に問題はなかるうで？」

それにはレインは降参したのか両手で前に押すような仕草をした。

「わかったわかった。次回から極力そうさせてもらいます！ってか  
話があつて来たのだから？」

「レイン君…あなたって結構自己中ね。」

「ああ、俺から話題を始めたのにそりゃないだらうって事？悪かった  
悪かった。」

ペルマはまた溜め息を吐く。そしてレインの前の席にゆっくりと座  
り体だけ後ろのレインの方を向いた。

「彼氏と彼女だと思われたら困るから手短かに話すね。」

「そうだな、伝説のカメラマンさんに撮られたら困るもんな。」



とレインは冗談交じりで話す。本当にクローナはいないのでこんな事が言えるのだ。しかしペルマはそんなこと知るわけ無いので、少々心配しながらも本題を話し始める。

「ねえ…本気で行くの？」

初めの問いはこれだった。今日の朝から見て当たり前の問いである。レインはそれに大して自信満々に”行くよ”と宣言した。しかし声のトーンはいつも以上に小さい。

「でもあなたに喧嘩を仕掛けるなんてよっぽどの強者に違いないわ。」

「それはそうかなあ？」

何か抜けたような言い方である。まるで”そんな事どーでもいいんだけど”とでも言ってるみたいだ。

その態度に力が入ったか、ペルマはさつきより声のボリュームを上げて喋る。

「絶対相手は複数よ！！そしてあなたは裏切らない限り孤軍奮闘、これじゃあ相手の思う壺！いくらレイン君でさえやられるわ！！」  
するとレインはペルマの口の前に手を出した。ペルマのお喋りに”ストップ”を掛けたのだ。

そしてまずは人差し指を立てて鼻につける。”静かに”とでも言いたいようだ。

「あまりでかい声で喋るな。せつかくの作戦がネタバラシになってしまう。」

「どーゆー事よ？」

ペルマも何と無く声のトーンを落として喋った。

レインはそこで辺りを見渡した。何かを確認した様にペルマは見えた。そしてふーっと一息吐いてから喋った。

「最初に出した昼食の話題、あれは無駄な会話をしたわけではないんだ。言ってみればちょっとした錯乱作戦だ。」

「中1なのに”錯乱”って…んで何をしたの？」

「最初の会話は俺とペルマの会話内容が”朝の話”じゃないって事を避けるためだよ。」

「…？」

ペルマは全く理解していないようである。しかしこれじゃあ誰もが聞いても分からないだろう。なのでレインは付け加える。

「まあ本人が聴覚範囲内にはいなくなつたから喋ろう。ともかく”闇夜の使者”の正体はこのクラスにいる。」

「えっ…！？誰なの？何で分かつたの？目的は？」

「一遍には質問には答えられないよ、口がいくつもあるわけじゃないんだからな。」

レインはそのままお喋りを自然に続ける。

「まあ後々公開するが今は”闇夜の使者”にしておこう。…まずは、朝の話を避けたのは闇夜の使者が聞かないため。ペルマと俺が今喋る内容と言つたらそれしか思えないだろう。そうなつたら闇夜の使者が聞いてる限り、話したい内容も話せない。だからあえて朝の事以外の話をして、闇夜の使者の耳からわざと遠ざけた。」

「なるほど。私も少々迂闊だつたみたいね。」

ペルマはレインの頭の回転ぶりに舌を巻いた。まさかそこまで考えて言動を起こしていたとは。新しい部活の部長は案外侮れないな…と思つたペルマ。そしてレインの話に再び耳を傾ける。

「そいつは…小学校の頃からかなり色々な奴をいじめている。その数は知れず、ともかく自分の気に食わない奴はすぐにいじめてた。」

「その人1人で？」

「そんな訳は無い。必ず集団でいじめるのがご趣味のようで。そして集団だけでなく、他の汚い手も平気で使ってくる。例えば学校の用具を中心とした武器を使ってきたり、まあそれ以外どんな武器を使ったかは知らないが…あとはさっきみたいに”不意打ち”してくる事もよくある。」

「そんな事してくる奴に、どうレイン君が頑張っても1人じゃ立ち向かえないわ…しかも闇夜の使者は自分の身を隠すことも出来るのよ！」

レインはそれには首を傾げた。身を隠す？じゃあこいつは”闇夜の使者”の正体を知ってるという事になる…

どうゆう事なのかさっぱり分からずレインは混乱してた。その様子を見てペルマも説明を加えた。

「ほら！さっき3階の窓から飛び降りてすぐ消えちゃったじゃない！覚えてないの？」

それを聞いてレインは”なあーるほど”と頷いた。全然眼中に無い話題だったのでそのことをすっかり忘れていたのだ。

ペルマはこれを見て”身を隠す能力がある”と思ったらしい。…確かに言われて見ればそうだが、それじゃただの中1の発想だなとレインは心の中でそう思った。

「まあ…消える能力は大丈夫。別に心配は要らないさ。とにかく話を最後まで聞いてくれ。時間が無いんだ。」

「う、うん。」

レインはペルマからその話を遠ざける事に成功した。

この消える話題についてはレイン自身の推理が果たして合っているのか分からないので、傍本人の確認が無い限りまだ話すわけにはいかないのだ。

そして尚もレインは話を続ける。

「その”闇夜の使者”なんだが、さっきの話からいってかなり狡賢い。だから受験にも合格してこの学校にやってきている。」

「それってある意味恐ろしいわね…」

とペルマ。レインは”そうだな”とあっさり流し、話を早口気味に進める。

「そして今、この学校でも一種の問題児として噂されている。先生方からも、このクラスからも…」

ペルマはそんな人がこのクラスにいるなんて知らなかった。しかもそんなに噂されてたなんて…

噂を耳にすることの無いペルマは少々孤独を感じて寂しくなったがすぐにその念を取り払った。そして核心に迫った。

「…このクラスの人なのね。それでそろそろ正体を教えてくれないかな？」

「いいだろう。闇夜の使者は…ピーニヤ・コラーダ。」

やはり…とペルマは思った。女子からも既に嫌われ者のピーニヤ、その訳は何から何まで汚いところにあつた。

机の中やロッカーが汚いのは当たり前。問題なのはその行動なのだ。この数日だけでも結構ピーニヤの噂というものは耳にする。

例えば女子をつけるストーカー行為。これが1番女子の間では噂になっている。

男子には恐喝をして軽くジューズなどを無理に奢らされるといふのもある。しかしこれはまだ表上の話で裏ではどんな悪さをしているのか全くの不明である。

しかし上記の2つの行動面においてもピーニヤは悉く汚い。

「大丈夫だ。殺されはしない限りな。」

レインは考えるペルマにそう言つて席に座らせた。もう昼休み終了のチャイムが鳴つたのだ。

これ以上喋つてたらピーニヤにバレるといふのもあつたから話をこれ以上延長させられない。

話せる内容は話せたし、それでいいかな…と表のレインはそう思った。

それに対し、裏のレインは今回の件には非常に興味を示していた。

喧嘩事が大好きな裏のレインなので、早速ピーニヤをぶちのめしたいと思つている。

「なあ、アイツを何時になつたら殴れるのかよ。早くアイツを俺の手で潰させてくれ。」

「お前さんが自分と同等に強い奴を求めているのはよくわかるが、1回様子を見させてくれよ。聞きたい事があるから先にそれを済ませてからな。」

「けっ、面倒だな。あんな奴早く潰すべきだぜ。ってかこの学校に不必要だな…この際」

「止めとけ。その場合になったらある程度力を制御させてもらうかな。しかし…今回、お前さんは活躍できそうだな。」

裏のレインはふっ、と表のレインに微笑した。そしてこう言った。  
「“できる”じゃねえよ。”する”んだ。絶対にな。」

## 依頼 No. 3 (後)

夏至に少しずつ近づいている空は夕方なのにまだ青い。

今日も雲が少ない綺麗な天気だ。

学校周辺の桜はちょうど満開になっている。

花見にはびつたり口のロケーションである。

体育館は…何部が使っているのだろうか。

靴裏のゴムが床に擦れて”キュツ”という音がしょっちゅう鳴っている。しかも複数。

教室は、様々な種類の楽器の音が鳴っている。

吹奏楽部が練習しているんだろが、個々に練習しているのでどんな曲なのかさっぱり分からない。

グラウンドは、主に野球部が練習をしている。

証拠に色々な声が響き渡っている。とても元気のある声だ。

外は、車の音しか聞こえない。学校付近は交通量が多いので人はそんなに歩かない。

自然といたら桜の木ぐらいだろうか。

レインはゆっくり歩きながら色々な音を聞いて楽しんだ。決闘に行く人間がそんな行為をするときは、よっぽど緊張している時だろうか。

しかしレインの顔は本当の余裕に浸っていた。

いや、むしろこれからの戦いを楽しみにしているような顔である。

何がレインをそれほど余裕にさせるのだろうか？

やはり裏のレインなのだろうか？

だが、それを知っているのは表と裏のレインのただ2人だけ。

体育館の横に入ると色々な所の音が小さくなった。

周りが塀のようなもので囲まれているからだろうか…

「やっとな戦える。腕が鈍ったかもしれない。」

「それはお前の台詞ではない。俺の台詞だ。」

「ちよつと真似してみただけ」

表も裏も”性格の分岐点”で楽しそうにじゃれ合う。

わくわくしているのは裏だけではなかったのだ。

「おつと、遂に見つけましたな。」

とレインは口からそう言葉を発した。目の前にはあの”闇夜の使者”がいる。

ちよつと椅子になる大きさの石にどっしり座り、姿は朝のままであつたが顔は俯いていて見えない。

レインの一言に少し反応した様に見えた闇夜の使者。それで何か言ってくるかとレインは相手の言葉を待ったが何も言っていない。

「気をつける。既に気配はそこらじゅうに溢れている…殺しの気配がな。」

「殺し」とは大袈裟な。でも手は抜かせてもらうよ。まずはお手並み拝見ですから。」

これは心の中の会話。それと同時に表のレインは闇夜の使者に気持ち悪いほど笑顔たつぷりに言った。

「そろそろ正体を見せてくれないかな、ピーニヤ・コラーダ！」  
しかしそう言った瞬間に後ろから近づくと気配を感じた。

「また拳？芸が無いねえ。」

その時には既にレインはピーニヤの方を向きながらも拳はしっかりと後ろの敵の顔目がけて殴っていた。

後ろにいたピーニヤの手下と思われる人物はそのまま顔を抑えながらその場にうずくまった。

結構レインのパンチが効いたようだ。

「余興は懲り懲りだ。さつさと始めろつて。」

これはまだ表のレインの意思・声だった。まだ裏のレインは発動しないようだ。すると…

パチッ…

どこかからか指を鳴らす音が聞こえた。かと思えば突如、四方八方から人が出てきたのだ。

人は男5人。どの人も体は頑丈そうで、さらに手には学校の箒を持っている。

こんなので5人に殴られたら打撲は最低でも出来てしまうだろう。悪ければ骨を折るか。まあそんなへまはしないが、とレインは心の中で思った。

「団体さんのお出ましか。まずはこの”表のレイン”が相手になるぜえー!!」

とレインは右手を前に、その掌は上に出し、左手は頭の上に構えた。相手の武器に対しレインは完全に素手で戦う様だ。

「フンツ!!」

1人の男が箒をレインに振り下ろす。戦闘開始の火蓋が落とされた。レインはまずその上から振り下ろされる箒を横にフリリと避けた。しかしすぐさま2人目の振り回す箒が、横から飛んでくる。

それは今度は身を引いて避けた。とりあえず敵との間合いを取る。それが最優先だった。

レインは狭い体育館の裏で何とか距離をとろうとする。しかし5人はバラバラに動いているのでなかなか全員から距離を話すことが出来ない。

大体の攻撃パターンは読めてる。上か横か。もうそれしかこの男達には無いのだ。

チームプレイなんかもしてくるのかな、と思いきやそれぞれが個々に戦っているのでチームプレイなんか全く無い。個人戦だ。

レインは何とか相手の攻撃の隙を伺っていたが、避けるのに精一杯で隙を与える事が出来ない。

しかも相手の攻撃の直後に返そうと試みるのだが、それも次の相手からの攻撃で逆に暇を与えさせてくれない。

(どうすればいいっかなあー?)



レインは何とか相手の隙を見つける方法を華麗に避けながら考える。表のレインの避け方には無駄が無いので体力の消耗は何とか抑えていた。しかし避けてばかりでは攻撃できない、その隙を与える事も出来ない…

そう頭の中で回転しているとただ体力が削れて行くばかりである。体力が減っていくと勿論動きが段々鈍くなっていく。向こうも体力が落ちていくが、何せ5人。体力もレインの5倍以上はあるだろう。なのでレインほど疲れていない。尚も箒を振り回すのだった。

すると次第に避けていたレインの体に箒が掠るようになってきた。

「クソッ！！」

レインは何とか避けようとするが結局はだんだんと箒の餌食になっていくとしていた…

「表のレイン、今回は俺の勝ちだ。とつとここから出せ。」

性格の分岐点で裏のレインが言う。しかし表のレインも負けていない。

「そんなこと言うな！まだ…まだ策はある筈…」

「うるせえ！！とつと出しあがれ！！邪魔だつ！！」

こうして裏のレインは分岐点にいた表のレインを無理矢理に押さえつけて封じ込めました。こうする事によって表のレインはレインの体から一時的に抜ける事になる。

そして裏のレインがレインの体に遷った。これで完全に裏のレインと化した。

「ケッ、眼帯が邪魔だな。」

と裏のレインはそう言う素早く眼帯を右目から左目に移した。レインの左目が眼帯だったのはこの理由にあった。

「俺は自分の目を大事にしたいという気持ちから、再び同じ惨事が起こらない為にもわざと残してあるんだ。」

こう自己紹介の時にレインが言っていたが実際には全然違ったのだ。

自己紹介の理由説明は単なる芝居。本当は自分の”裏”を隠すためだった。

普段の”表のレイン”は左目が中心であるが、”裏のレイン”は右目中心で行動する。

そしてこの様に表と裏が変わったときにはこのように眼帯が変えられる。

その裏の右目は表の左目とは違って凄まじい目をしていた。

まず大きな特徴として大きな切り傷が右上の眉毛辺りから、右下の鼻近くまである。

その目はしっかりと開いており、眼球の黒と白の割合が逆転しているのも特徴的だ。目だけみると人間の目とは思えない目を感じる。そして今は眼帯は左目にある。表を隠している証拠だ。

「さあて素晴らしいパーティを始めますか。」  
裏のレインはそう言うのと目の前に箒を持って振りかかってきた男を殴った。

その殴り方は絶妙で、まず相手が振りかかってきたと同時に前に1歩出てしゃがむ、そして下からアッパーを繰り出すのだ。

男は宙に舞い地面に倒れた。顎を殴られたので気絶している。

裏のレインはその様子を見ること無く次の行動に差し掛かっていた。素早く右にかに歩きの要領でステップを踏んだと思うと、そのまま右足で右にいた男の顔を蹴った。

そしてその勢いで近くにいたもう1人の男を左足の上段回し蹴りで頭から地面に叩きつける。

最後の2人は両サイドから同時に襲い掛かってきたので、レインは思いつきりジャンプして2人の頭に何とか足を乗せる。

さらに足を閉じ、2人の頭を足の力で正面衝突させた。大事には至らなかったが、勿論その2人も気絶した。

…一瞬だった。その戦闘に10秒は掛かってない。その間に5人の男を気絶させてしまったのだ。

「いるのは分かっているんだよ、ピーニヤ。出て来い、その人質を連れてな。」

と、どこからかピーニヤが草の茂みから出てきた。何と石の上に座っているのがピーニヤではなかった。

ちなみに石の上に座っているピーニヤの偽者もレインに呆気なく倒されていた。

当のピーニヤは普通の学校の制服姿である。ただその腕の中には誰かがいる…ペルマだ。そしてピーニヤの手元にはカッターナイフ…

「レイン君!! 助けてっ!!」

「おーっと動くな、自ら命を落としてもらっちゃあ困る…よく俺の事が分かったな。だがここまでだレイン、こいつがどうなってもいいのかな?」

ピーニヤは余裕たる表情でレインにそう言った。ペルマはもう半泣き状態である。

手元のカッターはペルマの首元にある。手が大きく動けばペルマは首が切れてしまい、死んでしまうだろう。

「お前の好きなペルマだぞ。死んだらどうなるかなあー? ひっひっひっ…」

ピーニヤはまるでゲームの様にレインを弄んでる。もう狂人の様でもある。

しかし裏のレインは全く動じていない。通常の中学生ではありえない様な冷静さである。狂人といったらこっちの方だろうか…

するといきなりレインはこう言った。

「いいよ。俺には関係ないし。」

「…!?!」

これにはピーニヤは勿論ペルマも驚いた。2人とも開いた顎が塞がらない。

そしてカッターを持った手も、ペルマを持った腕も呆れの余り緩んだ。

「へっ、表の言う通りだ…こいつの思考回路は小学生以下かよっ！」その瞬間、レインは1歩で素早くピーニヤの間近に迫り、右足でピーニヤの右手：カッターを持った手を蹴った。

ピーニヤは先程のレインの作戦にまんまと引つ掛かり、カッターの手をそれ程強く握っていなかったため、カッターが宙を舞った。

さらにレインはペルマを腕から引き離し、その腕1本を掴んでレインはピーニヤを柔道の要領で投げた。

ピーニヤは体全体を地面に叩きつけられた。しかし、レインはピーニヤの腕を離さなかった。

そのままピーニヤを腕1本でレインを軸にしてグルグルと回し始めた。そして勢いついた頃に投げ飛ばす。

勿論狭い空間なのでピーニヤはどこかに激突し、草に巻き込まれながら地面を転げまわる。

そしてレインはそのピーニヤの背中を足で押さえつけた。こうすれば攻撃の心配はひとまず防げる。

ペルマはその光景に戸惑うばかりだった。いや、思考回路は人質にされた時点からもう正常に働いていない。

もうこれ以上何も考えないようにしていると言った方が正しいのだろうか。なのでペルマは目だけその光景を目にし、頭では何にも考えていない。

しかしレインを止めなくてはいけないという無意識の反応だけが頭の中に出てきている。

「ヤバイ、このままだと…」

その先の事を考えることなくペルマはレインに走っていった。

「レイン君…お願い！もう止めて!!」

しかしペルマはレインに強く押されて、地面に座り込んでしまった。レインが見ているのはもはやピーニヤのみ。

その目は獲物を捕らえ、今にも引き裂いて食べそうな、飢えたハイエナのようである。

そのくらいレインは、ピーニヤを平伏させようとしている。もうピーニヤもボロボロで呻き声しか聞こえない。

裏のレインはその様子を見て確かに口元が笑ったのを、ペルマは見た。もう止められない。

そして裏のレインの足が、ピーニヤの頭を蹴ろうと構えに入ろうとした時だった。

「グワァ…クツ…クソツ…!!」

いきなりレインが頭を抑えて呻き始めた。頭の中で何かか乱闘しているのをレインが止めている…そんな光景だった。

そしてそれが数秒続いた後、レインは息を喘ぎながら言った。

「クソツ!!表のお目覚めか…残念だ。これじゃあ俺が正義のヒーローみたいじゃねーかよお!!」

こうしてレインの眼帯は左目から右目に戻された。”裏のレイン”の封印である。

「ふうっ…」

息を取り戻したかの様にレインは一呼吸した。そこでやっとペルマが尋ねる。

「あなたは…」

「ああ、大丈夫だ。裏のレインは戻しといた。今はちゃんとした表のレイン・カンダクゼノスだ。」

しかしそこでペルマは精神が耐えられなくなり、ふっと気絶した。それを表のレインがしっかり受け止める。

「済まないな。」

と一言添えてペルマを先程の石の所に寝かした。そして今度はピーニヤの処理にかかる。

「んで本当の目的は何だ？ピーニヤ・コラーダ。」

するとピーニヤは聞き取れなかったのか、レインに怯えているのか、何も反応を示さなかった。

そこでレインはもう1度ピーニヤに近づきながら大声で喋った。

「本当の目的は何だ！？」

すると今度は分かったらしく、喋り始めた。しかしその喋るスピードは非常に遅かった。

「入学式の…演説。…変な部活の設立…。俺はなあ…出しゃばった奴が…大ッ嫌いなんだよ…。」

それを聞いてレインは飽きた顔をしていた。ただそれだけの事でここまでするなんて馬鹿としか思えない。

「本当に君の思考回路は小学生以下か？」

…まあいい。次の質問だ。俺達の昼休みの話、全部聞いておいて何故黙ってた？

「…！？何故それを…。」

「1つの事にしか集中できない人間が無理に聞こうとしてるから行動がバレバレ。」

まあ俺は別にどこで決闘をしても良かったのだが…

成程。お前の条件が満たされてない…つまりそこに仲間がいなかったからか。」

レインは1人質問して1人納得していた。自問自答である。そして再び質問を続ける。

「あと、3階からの落下は…中1なのによくやるわ。」

あれは2階にいたお前の手下が上手くお前を2階にいれたんだろうな。」

これも凶星のようだった。ピーニヤは啞然としてレインを見ている。「何故…そこまで分かる。お前は一体何者なんだよ…！！」

するとレインは再び視線を地面に倒れてるピーニヤを見てこう言った。

「レイン・カンダクゼノス。表と裏の完全孤立した人間を持ってい

る不思議な中学生さ。」

レインはそう言いきると腕を組み、何かを考え始めた。何かを忘れているような…そんな顔をしていた。

そして5秒ほどするとレインの顔がぱつとした。その何かを思い出した様だ。

すると胸元のポケットからなにやら紙が出てきた。その紙をレインはピーニヤに渡す。

「そうそう、これウチの部活”なんでも部”の紹介文。

…本当は君も仲間が欲しかったんじゃないかってね。」

こんな時ペルマが気絶してなかったら『こんな人にまで渡すの!?!』なんて言われていただろうか…とレインは思った。

ピーニヤは何とか寝ている体勢から座る体勢に体を起こし、紙をゆつくりと開けた。

そこにはなんでも部の紹介が少しばかりか書いてあった。作りたてなのでそんなに内容量も濃くは無い。

それを見ているピーニヤは真剣な眼差しであった。先程までの悪いピーニヤでは無いようだ。

「自分の居場所をまだ求めているのならここに来な。いつでも待ってるからな。ああ、それとその用紙はコピーしたやつだからお持ち帰り自由ね。」

とレインはそう言い残して帰ろうとした。しかしペルマがいることをすっかり思い出し、どうしようか迷った。

そして大きく溜め息を吐いた後、ペルマを何とかおんぶして運ぶ事にした。

レイン自身こんな事はあまりしなくなかったのだが。

保健室までなら何とかなるかな…と考えながら体育館の裏から立ち去ろうとした。

一方ピーニヤは、紙を見て一瞬迷った。どうしようか…と。そして決心したのはレインが後ろを振り返ってからだった。

ピーニヤはその紙を片手でクシャと丸めると、それを捨てた。さらにその代わりに近くに落ちてたカッターナイフを拾った。やるなら今しかない……!!

ピーニヤは最後の力を振りしぼって立ち上がり、走ってレインの背中、ペルマの背中に刃先を向けた。

これで…これでペルマと、レインは…と思ったその時だった。

「そんなのあかんでえ〜。」

「だっ、誰だ!?!」

反射的にピーニヤはその声の方へ振り向いた。レインも動じる事無く、ペルマを背負いながらゆっくりと振り返る。

その声の元は上からだった。体育館の裏なのに上から…と言つことはその人は今、体育館の上にいるのだ。

「あかんで、そんな事してもその人にはあんさんの行動ははっきり見えてはりますからなあ。」

体育館の上にいることにも驚くが、それ以上に物凄い訛りのある喋り方にレインも驚いた。そして尋ねる。

「お前は一体…何者だ?」

依頼 No. 4 に続く





もう逃げたい気持ちで一杯だった彼女は、暗闇の地に落ちてもすく  
に立ち上がって、覚束無い足取りで走り出した。  
今の衝撃で強く足を打ったが、今はそれよりも逃げるのが何より  
の先決だった。

彼女は遠くへと懸命に走る。走って、走って、走り続けた。

するといつからか、遙か向こうに一筋の光が見えたのだ。彼女は恐  
怖からの脱却の為、光に向かって必死に走った。

助かる。助かったんだ！！

そう思い光の中に入っていつて助かった…と思っていたのは彼女だ  
けだった。そうではなかったのだ。

「…！！」

彼女が見たのは”希望の光”では無く”絶望の光”だった。

彼は…いやレイン・カンダクゼノスが赤い部屋の中、数人の倒れて  
いる人の上に立っていたのだ。

そしてレイン本人は彼女…いやペルマ・ゲインズに向き、口元だけ  
を微笑ませた…

バサッ

身体を勢い良く起こし、毛布を必死に掴みながらペルマは目を覚ま  
した。

起きた瞬間パニックを起こしていたのでペルマ本人何が何だか分か  
らなかった。まだ夢の中にいるみたいだった。

しかしゆっくりと、詰まった息遣いから呼吸を戻し、握り締めてい  
た手を緩めた。そして身体を布団の上に戻したのだ。

ここでようやくペルマは先程のは自分の作った”悪夢”に過ぎなか  
ったと理解した。しかし…どうしてあんな夢を見たのだろう。

ゆっくりと辺りの景色を見渡しながら、自分の記憶をさかのぼる。

確かあの時…

夢の中同様、ペルマの一番新しい記憶の中にピーニヤの頭を蹴ろうとした時のレインも口元だけ微笑んでいた記憶がある。

あれはレインが表の人物から裏の人物に変わった時だった。

ペルマ自身はピーニヤの腕の中に捕まっけていて、命の危険性があつたにも関わらず、レインはゲームを楽しんでるようにピーニヤを挑発していた。

そしてピーニヤをボロボロにしたあと、頭を蹴ろうとしたレインをペルマは止めようとしたが、呆気無くレインに突き飛ばされたのだつた。

しかし、表のレインが何らかの原因で裏のレインを止めてくれたお陰で、蹴る前に表のレインに戻った事まで記憶にある。

その後は自分の精神が耐えられずに気絶してしまつたが…あれからどうなつたのだろうか？

気になるところだが、それ以上にペルマには思うことが一つあつた。

これからもそんなレインと一緒に部活をしていかななくてはならないのか？

あの裏のレインを見ていると何かとんでもない事を起こしそうで、そして制御が効かなくなつたあかつきには罪を犯すという事まで考えられる。

現時点でピーニヤも相当痛手を負つたはずだ。もしそれ以上の敵が出てきたらそれ以上の痛手を負い、犯罪にまで…

そしてその場にきつといる自分も考えただけで背筋がゾツとする。

私はこれからその恐怖と過ごしていかなくてはならないのだろうか？しかし、ペルマはその時レインのあの言葉を思い出した。

「じゃあ退学ギリギリまでやってみないか？義務教育の範囲内だから退学なんかさせられないのさ。それは俺が保障するよ。」  
「なんでも部勧誘の時にレインがそう言つてた。つまり自分も含めて退学にならないって事か。」

しかも今回もギリギリのところまで止める事が出来たので、裏の制御

機能は完璧ではないのか？でももしその機能が突然無くなったら？

でも…でも…

”でも”を連発し頭の中で思いが交差している為、ペルマ自身も正直どちら側に行けばいいのか全く分からない。

そこでペルマは一度頭の中の思いを全て消して、新しく提案したしばらくは普段の学校生活に専念しよう。

それなら、もしかしたら向こうからの反応が来るかもしれない。そして、ペルマに時折考えてくれる時間を与えてくれる。

その間に「あの人」にだけこの事を相談しよう、とペルマ自身心中に決めた。そう、私の大事な「あの人」に…

ペルマはその事を考えている間にここが保健室だと認識した。そして丁度考え終えたその時、保護用のカーテンの向こう側に人影が見えた。

「ペルマさん、起きた？」

「あ、はい。」

カーテンの向こう側にいたのは保健室の先生だった。保健室は初めての利用だったが、若い女性の先生なのでペルマにとって信頼の置けそうな先生だ。

「外傷で目立ったところは膝の擦り剥きぐらいだったんだけど、どこかに痛い所とか気持ち悪い所とかは無い？」

「えーっと…起きたばかりなので少し気持ち悪いぐらいだけかな？」

とペルマは言いながら膝に目をやる。スカートの裾の下から見える膝の擦り傷、これはレインに飛ばされた時に出来たやつだ。

ちよっと擦り剥いただけなので痛くはないが、それ以上の痛さが胸に伝わってくる。

「ところで…どうしてあなたはこんな怪我をして気絶してたの？」  
これに対して正直に話してもまともに信じてもらえないだろう。

いや信じてもらっても余計に大変だが。

とにかくこの理由を懸命に創作し、そして出てきた答えはこれだった。

「えっと…帰り道にバイクにはねられかけたんです。

それでそこでレイン君が助けてくれて、間一髪のところでも助かったんですが…

どうやら驚いて気絶してしまったみたいです。

ところで先生、ここまで私を運んでくれてありがとうございます。」「

とりあえず少し話を逸らして、理由に関して深く追求されないようにした。

多分ピーニヤとの決闘の後でレインは何とかしてペルマを目立つところに置いといてくれたのだろう、自分の正体がバレない為にも。

しかし、保健の先生の答えはペルマの考えとは少し違った。

「いいえ、とんでもない！運んでくれたのは多分そのレイン君よ。」

「嘘っ…」

その瞬間ペルマの顔が赤くなった。レイン君がわざわざ私をここまで…

「保健室にいきなり入ってきたかと思うと、”理由は全部ペルマから聞いてください！俺はただの目撃者なので！”

とか言っぺルマさんを私に渡してすぐにどこかに行ってしまったわ。」

そのレインの気遣いにペルマは少し嬉しかった。しかしその嬉しさも”裏のレイン”を考えるとその嬉しさも不安に飲み込まれる。

「そうですね…またレイン君にはお礼を言いたいと思います。」

そのお礼もいつ言えるかは分からないが…とペルマは思った。

「それが良いわね。じゃあまた早い目に病院に行つてちゃんと見て来るように。その元気があれば帰れそうだけど…時間もあるし、どうかかな？」

「はい、大丈夫です。」  
そう言いながら今度は先生の開けたカーテンの隙間から時計を除く。ピーニャとペルマの決闘から少なくとも二時間経っていると思う。きつと親も心配しているだろう。そう思い、ペルマは帰る支度を始めた。

保健室の先生にお礼を言つて、担任のモンブルク先生にも連絡をした後に下校し始めた。

いつもは別の友達と帰ったり、時にレインとも帰ったりしているペルマなので一人の下校は珍しい。そしていつも以上に不安の気持ちで一杯だった。

「レイン君……」

ペルマは空を見上げる、春の夕空は寂しくも濃い橙に染まっていた……

次の日からペルマは至つて普通の学校生活を過ごしていた。

女友達と楽しくお喋りし、まだ喋った事の無い人に喋りかけたりしてひと時を楽しんだ。

他の子たちは既に仲良しになっている人が多かったがペルマは、あの初日からレインと共に行動する日々だったので、友達があまりいなかったのだ。

「もう！ペルマ、入学式から今まで何してたの！？」

「何かあの目立ちたがり屋のレイン君と一緒にいたけどどーゆー関係？」

「もしかして付き合ってるの！？」

やはり皆が問いかける点はそこだ。とりあえずペルマは”レイン恋人疑惑”だけを完全否定し、他の事はほとんど喋った。

レインに誘われてなんでも部に入った事。それから自分も含めてちよつとした冒険をしていた事。

ただし、ピーニャの時の”裏のレイン”や、その後の自分の悩みなどは決してクラスの誰にも言わなかった。

しかしその話のお陰で、ペルマはクラスの女子と仲良くなった。そ

の事はペルマにとって大いに嬉しかった事だ。

また、授業もいつもの学校生活に戻ったので勉強にも励む事が出来たが、その時ふと気がつけばレインをチラッと見る事が出来る。そしてすぐに視線を離す。

そんな事が度々無意識に起こるといふ事は、やはり自分自身レインを気にしながらも恐怖に怯えているのだと自分で分かった。

その証拠に今でもペルマの頭の中にはピーニヤの時のレインや、夢の中に出てきたレインが何度もフラッシュバックされる。

そこでペルマは裏のレインを見たあの日の翌日の放課後に「あの人所へ向かった。とりあえず早く相談したくて仕方なかったのだ。

あの人なら…いつも私を励ましてくれていたあの人なら、そばにいてくれるだけで何故かホッとしてしまう。

でもそれ以上にどうすればいいか言ってくれるかもしれない。頼りすぎるのもよくないが、ペルマはその人に縋りたい気持ちで一杯だった。

あの人は学校にも家にもいない。病院にいる。ペルマは足早にその病院に向かう。途中でお見舞いの花を買いに近くの花屋さんにてから行った。

花と財布を抱えながら病院の中に入り、受付で”その人のお見舞い”だと看護婦さんに告げる。

”常連のお見舞い人なので看護婦さんも顔を覚えていて”どうぞ、どうぞ”とにつこりとした顔で通してくれた。

病院内はお年寄りがゆっくりと歩いている。その中ペルマはあの人の部屋だけを見ながら早足で階段を上り、廊下を歩いていく。

室番と名前を確認してノックを二回して部屋に入るなり、ペルマはその人のところに縋り寄った。

「ペツ…ペルマさんどうしたの!？」

その人も突然のペルマの行動に一瞬焦った。しかし、その人は状況を判断してペルマの背中にほっそりとした手を置き、さすった。

ペルマもそれに安心して、その人のベッドに顔を埋める。

その無言の状態が幾分経ったのだろうか。ペルマはゆっくりと顔を上げて、来てから初めてその人の顔を見た。

その人は病気の影響で全体的にほっそりとした体つきをしていた。「痩せているから女性として羨ましい」とか言えるレベルではないのは当たり前。

しかし、顔はいつも元気そうにっこりしている。ペルマはその人のいつも笑ってる顔が好きだった。

そしてペルマは話し始める。

「いきなり来てごめんなさい…マリアさんに相談したい事があって…」  
それにマリアと呼ばれた女性は首を振る。

「いいえ、ペルマさんが来てくれた事、非常に嬉しいわ。私にとってあなたに会えるのが楽しみの一つです。それで…今日は突然どうしたの？」

そこでペルマはゆっくりと心の蛇口を捻り出して、出てくる話題を全てマリアに話し始めた。

こちらはまずは踊祝中学校に入学した話から始まり、なんでも部、表裏のあるレイン、それを見てしまったこと。

あれから一日が経ち、マリアがいるお陰で大分気分が落ち着いている。なのでゆっくりと話す事が出来た。

マリアもペルマの顔をしっかりと見ながら片言も聞き逃さず話を聞いていた。

そして話し終えた後、ペルマはゆっくりと息を吐いた。自分でも気付かないぐらい心の蛇口をおもいきり捻って喋っていたらしい。

しかし、その長い話にもマリアはペルマから目を逸らす事無く最後まで聞いた。

それからうんうんと頷きながらマリア自身の頭の中で今の話をゆっくり整頓し始めた。



「つまり、なんでも部創設者のレイン・カンダクゼノスって人が多重人格で、その裏の性格があまりにも残酷すぎるのね？」

「えっと…信じがたいと思いますが、レイン君本人”別々の人間がいる”って言っていました。なので”多重人格”とはまた別らしいです。」

「そうですか。でもペルマさんは裏のレインが制御しきれずに暴走してしまう事を恐れている訳ね。」

この十分程度の話でちゃんと理解して、こつやって普通に話できるマリアは頭の良い人だとペルマは改めて感じた。

自分はこの話をまとめる…いや、まとめようとせずつ断片的に喋っただけであるのに、マリアは核心をしつかり突いている気がする。

ペルマはマリアの言葉に正直に頷くと、ペルマはまた少し考えた後こう言った。

「これからその”なんでも部”をどうすればいいか？それは悪いけど私の口からは辞めるとも辞めるなとも断言できないわ。

辞めれば、そのレインって少年の裏から逃げる事が出来る、危険な仕事に立ち向かう必要が無くなる。安全で楽しい学校生活が送れるわ。

けど、辞めてしまえばレイン君の制御は誰が出来るの？貴方の言ってるそのマローネって少年では無理のような気がするし、止められるのは今の時点で貴方だけ。

そして今更辞めるといふのもちよつと無責任よ。レイン君は貴方を信じてその”なんでも部”に入れたのに、辞めるのは勝手な気がするわ。

裏の性格も最初の自己紹介で言っただんでしょ？”危険が伴う部活”だと聞いてたんでしょ？貴方は一体何を求めているの？それをはっきりさせないといけないわ。

だから今の時点で断言は出来ない。でも私の考えからして、今辞めるのは色んな”モノ”を失う覚悟が必要だわ、形有るモノ無いモノ

含めて。」

そして、ペルマの目を再びしっかりと見て、笑顔で言う。

「貴方なら出来るわ。だって貴方は私の大好きなペルマ・ゲインズですもの！」

その言葉にペルマはただただ頷くしかなかった。嬉しさが溢れ返ってもう何も考えられなかったし、心の中にあつた蟠りも消えた気がした。

そしてペルマもここ久方に見る笑顔で

「私、頑張ります！！」

とマリアに誓ったのだ。まるで教会に来た”悩める子羊”が神の御加護を受け、その感謝の意として祈るが如く。

何度もお礼を言った後に、マリアとちよつとしたお喋りを楽しみ、日も暮れる頃にマリアに別れを告げた。

「マリアさん、お大事になさって下さいね。」

「ペルマさんこそ、心の怪我早く治る事を祈るときますよ。」

こうしてペルマは病院を出たのだが、そこで突然あることを思い出した。それは手に持っていた花だった。

話に夢中になりすぎて、手に持っていた花のことを思いつきり忘れていた。

花はペルマが蹲ったりしたので、少しくしゃくしゃになっていたが、お構いなしにペルマはまた病院に戻った。

受付の看護婦さんに恥ずかしながらも忘れ物と言って、再びマリアの病室に向かった。

「マリアさんごめんなさいっ！！すっかりお花渡す事忘れていて喋ってしまっていたの！」

いきなりの入室にかマリアは少し驚いた表情をしていた。いや…結構驚いていた。

「えっ…ああ！いいわよ！そうやって気付いてまた戻ってきてくれる事が非常に嬉しいわ。ありがとう。」

こうしてペルマは花を渡して、また病院を出た。今度は…忘れ物は無いみたいだ。

ペルマはこうして行きのどんよりとした空気とは逆に晴れ晴れしい気持ちで家路を急いだのだった。

依頼 No. 4 (中)

それからペルマは翌週までゆっくり考える事にした。マリアの言う  
とおり”自分の求めている事”をはっきりとせずに入ってしまったっ  
ていたと思う。

一体私は…何の為に入ったのか。そして目的が見つからず様々なモ  
ノをなくして去っていくのか。

マリアの台詞からははつきりと「辞める」「辞めるな」「辞めるな」の言葉は出  
なかったが、その話し方から「辞めるな」の方がはつきり出ていた  
と感じられた。

そしてマリアに言われてペルマも「辞めない」方向で考え始めた。  
それなら”自分の求めている事”を再確認しなくてはいけない。

私は一体何を求めて”なんでも部”に入部したのか、レインに初め  
て依頼したあの時の記憶を探ってみた…

それから一週間ペルマはその事を考え、結局”なんでも部”のメン  
バーとはピーニヤとの事件から喋らずに毎日の学校生活を何不自由  
無く過ごした。

そしてまたレインたちも一週間別に目立った行動も向こうから誰か  
が喋りかけてくることも無かった。

一週間後、その日はまずレインから話しかけた。朝、まだ人の少な  
い教室で登校してきたレインはまだ少々眠そうだった。

「あつ、あのつ…レイン君？」

「ちょうど…一週間か。元気にしてたか？」

眠気が原因でもあるか、相変わらずのマイペース振りである。とり  
あえず元気であることを伝えるべく一回頷く、するとレインは言う。  
「そうか、ようやくおでまじって所だな。いや…丁度良かった、と  
でも言える。放課後、ちょっとついてきてくれないか？」

いきなりの誘いにペルマは少し驚いたが、その後は冷静にうん、ま

た頷いた。

一体、放課後何の為に呼び出したのか非常に気になったが、それは無論放課後にならなくては分からないのでペルマはとりあえず放課後まで待った。

半分不安げに、半分期待を込めて…

そして放課後、レインに連れて行かれたのは特別教室だった。

特別教室と言えば最初の「学校案内」で言っていたが、特にと言った目的は無い、そして色々な目的で使える部屋、いわゆる小学校の”多目的教室”みたいなものだった。

その教室の扉の前までレインに案内された。そしてレインはどこかの紳士の様に頭を下げ、手を部屋の方に差し出す。

「さあ、どうぞお入り下さいませ。」

そう言われて、何が何だか分からないままペルマは特別教室の扉を開けた。横にゆっくりと…

「…!? こっ、これは一体…!! しかも…どうして…!?」

ペルマが入ってまず目に入ったのはマローネの姿。自分がいた頃から”なんでも部”のメンバーだったので知っている。

そしてレインが案内するって事は少なくともこれは”なんでも部”に関する事に違いない。それならこれは”なんでも部”メンバーの集合だ。

それから目に入ったのはあの…あのマリア・マドレー又だったのだ。ペルマの一番の友人であるマリア。病気で病院にいたはずのマリア…どうして…どうして…?

謎が謎を呼ぶばかりで何も頭の中では解決できていない。

それから更に見えたのは見知らぬ男子生徒と女子生徒が一人ずつ。

この一週間でレインは一体何をしていたのか、何かレインの凄まじさを感じたペルマ。

「まあちよつと待て、説明は後だ。とりあえず…っ」と。

レインは部屋に入ると、まずは不思議なメンバーの端の方にいる先

生を呼んだ。

「モンブルク先生、一応これが”なんでも部”全メンバーです。これでよろしいでしょうか？」

するとモンブルク先生は嬉しそうに頷く。

「レイン、良く頑張ったな。じゃあまた後でまた目的とか内容とかを書くことになるがいいか？」

「はい、勿論です。あつ先生、とりあえず部員同士で少し話し合いをしたいので、一旦席を外してもらってもよろしいでしょうか？」

「分かった。ついでにその”なんでも部”の確定をしなくてはいけない手続きもあるからな。それもちよつとしてくるよ。」

そう言つてモンブルク先生は特別教室を後にしたのだった。ペルマは膠着状態でそれを見ていた。また思考回路が回っていない。

「さてつと…何故病院にいるはずのマリア・マドレーヌさんがここにいるのか？それを説明するにはまずは順番としてこちらの二人から説明しなくてはならない。」

その前につと…とレインはペルマが知らない二人にペルマを紹介した。

「この人がペルマ・ゲインズだ。まあ詳しい事が本人から聞いてくれ。えーつと…まずはこのグロリア・ファースラムから。」

そしてレインはあの日からゆっくりとこの一週間の”真実”を語り始めた

ここは体育館裏。レインとピーニヤの決闘を終えて、レインが帰ろうとしたところをピーニヤがカッターナイフで襲おうとした時だった。

「そんなのあかんでえ〜。」

「だつ、誰だ!？」

反射的に持っていたカッターナイフでレインを刺そうとしていたピ

「ニヤはその声の方へ振り向いた。

レインも動じる事無く、気絶しているペルマを背負いながらゆっくりと振り返る。

その声の元は上からだった。体育館の裏なのに上から…と言うことはその人は今、体育館の上にいるのだ。

「あかんで、そんな事してもその人にはあんさんの行動ははっきり見えてはりますからなあ。」

体育館の上にいることにも驚くが、それ以上に物凄い訛りのある喋り方にレインも驚いた。そして尋ねる。

「お前は一体…何者だ？」

しかし、その手元では上を向いていたピーニヤのナイフを取り上げていた。

「いやあ、良かったわあー。」

と言いながら上から落ちてきた一人の少女…いや降りてきたの方が正しい表現なのだろうか。

レインの所に一直線に降りてきているが、階段や足場など何も無い。何とふんわりと降りてきているのだ。

まるで月にいる人のジャンプみたいにふわり、ふわりと降りてくる。そしてレインとピーニヤの前にゆっくりと着地した。

「あなたは…一体何者ですか？」

再び訊き直すレインの口調は、相手が女性なのでやけに丁寧になった。それに彼女は訛った言い方で答えた。

「ウチ？えつとー…そう！グロリア・ファールムや。よろしくなあ

」

外見は踊祝中学校の制服なので何も変わらない。体格も至って普通…女性から見れば”痩せている”と言えるのか。

髪は肩ぐらい。分ける為に前髪に透明色のヘアピンをつけている。特徴はそれぐらいだろうか。

あと、あると言えば彼女からは表のレインからでも何か不思議な気配を感じるぐらいだろうか。しかしこれは何も根拠にはならないの

で却下。

「色々聞きたいことがあるんですが…まず何故ついできたのですか？」

「まずはそこが一番気になる。これでは一種の”ストーカー”だ。するとグロリアはこう答えた。

「うーん…何と無くかな？」

とても曖昧な答え方だ。レインもこの答えに頭を掻き毟る。

「いや、ちゃんとした理由があるでしょう？何も根拠無しについては来ないと思うし…」

「ウチの気分で来たらアカン？」

「いつ、いや…でもさあ…」

グロリアの雰囲気を押され、レインは口籠る。これ以上質問して彼女の機嫌を取り損ねても困る。そこで次の質問に移る。

「じゃあさ…どうして今ゆっくりと降りる事が出来たの？」

「えーっと、落ちたら危ないと思うしゆっくり飛んでいるんやで、今度は最早話が噛み合っていない。レインは再び頭を掻き毟って、困り果てた。

するとそこに先程表のレインに押さえつけられて”性格の分岐点”に戻された裏のレインが口を開く。

「こいつは…クローナ追尾の時に俺を追尾していた奴だ。」

「えっ！？嘘だろ…じゃああの時

”決して自分が尾行をしている者だとしても、時に尾行される者になるのだ。後ろを取られたらそれで御終いなんだよ。”

つてのはグロリアの事だったの！？」

「ああ…ただあの時は招待が掴めないから単なる忠告だ。もしも、これが暗殺者なら確実にお前は死んでる。俺の肉体でもあるんだから注意しろ。」

もう一つ言っておくがコイツにこれ以上何かを聞き出してたら俺のストレスが溜まる。止める。」



そう言われてレインは”ちよつと待つて”と言ってグロリアの話から一旦手を引いた。そして少し考える。

まだ何も分からないが、この謎深き少女にはレインが興味をそそる面白い要素が沢山あるかもしれない。

まずレインを追尾した目的、飛行能力が何なのかを知りたい。そこで既にレインの興味は津々だった。

…このグロリア・ファースラムを仲間にするには面白いかもしれない。そうレインは考え、口を開いた。

「なあグロリア…」

しかしその時グロリアの口も開いた。

「お前さん、”なんでも部”に入らないか？」

「レインくん！ウチを”なんでも部”に入れてくれへんかなあ？」

二人が言ったのは同時だった。そしてお互い自分の発言により、相手の発言が全然聞こえなかった。

「えっ…今何て言った…？」

「だからウチを”なんでも部”に入れて、って言ったんやで！レインくんは何て言うたん？」

「いや…」なんでも部”に入らないか、って…って事は入ってくれるのか！？」

「うん、レインくんこそ入れてくれるん？ありがとーな！」

意外な展開にレインが戸惑うばかりだったが、これでグロリアの加入が決定した。これで残りは二人。

しかしこれも謎だ。一体グロリアは何の意図でこの”なんでも部”に入りたかったのか？単なる好奇心？これもよく分からない。

とりあえずグロリアに部活の紹介をしたいところだが、生憎のこのペルマによつて両手が塞がっているために、部活紹介の紙が出せない。

「それじゃあ…一度保健室までコイツを運びたいし、ついてきてくれるかな？」

「ええで！」

そしてレインはもう一人の始末もつける為、首だけ振り向きピーニヤの方を向いた。そしてこう言う。

「別にお前さんが部活加入しようとも、喧嘩をしようとも、いくらでも相手してやるよ。」

ああ、それとお前さんの可哀想な手下さんは解放だ、そう伝えとくんだ。さもなければ…分かってるな？」

半分脅しのようにも聞こえるが、ピーニヤがさんざん友達を手下、いや奴隷のように使ってきたのでそれに比べたら何とも無い。

そしてピーニヤも本当に馬鹿ではないので、それぐらいの学習能力はあるんだろう。それが無かったらレインはまた喧嘩しに行くつもりでいるが。

とりあえず、レインは体育館裏を立ち去った。空はもう茜色に染まっていた。周りの物音は何一つ変わっていない。

レインは一人無傷で体育館裏を後にし、急いでグロリアと一緒に保健室に連れて行った。

とりあえずこの光景を誰かに見られればどのような事を言われるのか大体見当がつく。それだけはどうしても避けたかった。

そして、運良く誰にも見つからずに保健室まで辿り着いた。そして保健室の扉を開き、保健の先生の驚いた顔が目に入った。

「ちよっ…ちよっ…とどうしたのその子!？」

「えつとお…理由は全部このペルマから聞いてください!!俺はただの目撃者なので!」

と言ってレインは抱えているペルマを先生に渡すとそそくさと立ち去った。そして部活紹介と荷物を取りに兼ねて、自分の教室にグロリアを連れて行ったのだった

「それがグロリア・ファースラムの”真実”だ。」

レインはここまで話すと一呼吸置いた。勿論グロリア本人がいるの

で、自分の思想は言わずに話した。

そしてペルマは自分の気絶している間にそんな話があったのには驚いた。そして、改めてレインが自分を保健室まで運んでくれた事に感謝する。

「レイン君、その時は私を保健室まで運んでくれてありがとう。」

「ん？ああ、構わないよ。外に放置しといて風邪でも引いたら大変だからな。」

「そう言ってるけど、ホンマは恥ずかしそうに保健室までダッシュしてはったでえ〜」

グロリアの言うまた別の”真実”にペルマはクスツと笑った。レインも顔を赤らめている。

「こっ、今度は俺の前で気絶するなよ…」

それは今後のレイン次第だ、とペルマは思った。そういえば、レインはちゃんとペルマに裏のレインについて話をしてくれるのだろうか？

とりあえずマリアの話も聞きたいから最後まで余計な口出しをせず、に話を聞くことにした。

「じゃあ次のその方は…？」

「そっだ、レイン。拙者の話がまだであろう。」

「ああ、悪かったって。じゃあ次はこの少年、ジャック・スキップの”真実”だな…」

翌日、レインの心情は少し不安定だった。その原因は先日裏のレインを見て気絶したペルマだった。

裏のレインの冷酷さを見てショックを受けたに違いない。それで怖くなつて”なんでも部”から逃げ出したりしないだろうか…？

「いいじゃねえーかよ。勝手に辞めるがいいさ。」

裏のレインはイライラしながら”性格の分岐点”にいる表のレインに話しかける。

「でも、俺は初めっから忠告してたし、それに初めて”なんでも部に興味を持つてくれたんだし…”」

「精神弱き奴に我が仲間不要。大体俺は気に食わねえんだよ！人の顔を見て、あんなに恐ろしい顔しやがって。そして折角のチャンスをお前のせいで逃すし。」

「仕方ないだろ！あれ以上してたらピーニヤの命は危なかった！」

「へっ、人間そんなに簡単には死なねえよ。しかもいじめっ子のアイツは骨のある奴だ。あんな攻撃で死んでたまるか。」

「裏のレイン！」

「うるせーな。黙ってる。」

裏のレインに睨みつけられて表のレインは何も言えなかった。そこで一度話し合いが終わる。そして元のレインに戻る。

それまで神経はどこかに飛んでいるが、登校中でしかも朝なのでポロロとしていても特に誰にも言われないだろう。

…ペルマは何も相手をしないでしばらくはそっとして置こう、とレインは結論を出した。

今自分から話しかけたらどういう反応を取られるか予想できない。きつとペルマもまだ情緒不安定だからだ。

ならば、ペルマが話しかけてくるまでにこちらはこちらで作業を進めておこう、とレインは思った。

そして、決意を込めたその顔で学校の門をくぐった…

「レインくん、おはようさん」

といきなり横から声を掛けてきたのは昨日晴れて”なんでも部に仲間入りしたグロリア・ファールラムだった。

「ああ、おはよう。朝から元気だね。」

「いやいや、ちょっとな、レインくんの良い知らせと悪い知らせを報告したくて来てん。どっちから聞きたい？」

一体この一日でどのように情報を集めてきたのか…？自分みたいに他の奴もあのフワフワとした動きで追跡をしているのだろうか…？

謎が謎を呼び、余計に頭をこんがらがせるグロリアだった。しかしとりあえず…

「悪い話から聞かせてくれない？」

グロリアの”悪い情報”を聞くことにした。

「あんな、昨日のな喧嘩騒動あつたやんか？あの後、ピーニヤたちが倒れているのを他の人が見つけて保健室に運んでん。

そしたら”誰がピーニヤ達にこのような怪我を負わせたんか？”って先生達で話題になるやろ？

んでピーニヤ達がそれについて一切なんも喋らへんから、学校はそれについて今日から取調べや。

ちなみにピーニヤ達が喋らへんかったのは、レインくんにも負けた屈辱か、はたまた感謝の意か…運がよかつたなあ。

それで話は戻して、多分いつかはレインくんが睨まれる対象になるかもしれないから、気いーつけときーやー。」

確かにレイン自身はただ単に一人対多数で喧嘩をしただけなのだが、それは学校から見れば集団でイジメを受けている様に見れないこともない。

しかし、相手はあのイジメっ子のピーニヤだからそう簡単に犯人は見つからないはずだ…あの間に誰もあの現場を見ていなければ。

「…誰かに睨まれる生活はもう慣れた。」

「えっ？」

「別に今始まったことではないさ。むしろまた面白そうな話じゃないか。…良い話だ。」

とレインは鼻で笑った。その顔を見てグロリアも安心した。

「流石レインくん。そのポジティブさに驚くわあー。じゃあ次は本当の良い話をしてあげる。」

新たな入部者が出てきたで！昨日戦ったピーニヤの手下に”ジャック”って男がいたんやけど、その男がレインくんの部活に入りたいってゆーてんねん。

ちなみに私と同じクラスの1年2組ね　またすぐに行ってきたあけてくれる？」

その情報はレインにとって本当に嬉しかった。ここ2日で、仲間が2人増えるとは嬉しいものだ。

これであと一人集めれば5人になる。これも上手くいくといいな、と表のレインは思った。

「人生山もあれば谷もある。そう簡単に山ばかり続くと思うな。」しかし裏のレインは相変わらず”性格の分岐点”で皮肉な口を叩いていたのだった。

そこでふと表のレインは思い出して、グロリアに言う。

「あっ、そうそう。ちょっと注意点があるんだけどいい？」

「ええで。」

「しばらくは俺の許可があるまでペルマには関わらないでくれ。あと、グロリアが喋っていいのはお前のクラス、1年2組に俺が行ったときだけだ。」

それにはグロリアは残念そうな顔をした。これですっとレインとも喋れると思っていただろう。

レインの目から見て、恋愛感情は無さそう……いや、それすら伺いにくい。本当にレインの目からしても何を考えているのかさっぱり分からない。

「何でえ？」

勿論レインは、グロリアと喋りたくないという理由ではなかったのは言うまでもない。

「ペルマには”裏のレイン”を見てショックを受けてる間に、こちらで坦々と仲間集め進めなくてはならない。そして集まった時点でペルマを驚かせたいんだ。頼む。」

するとグロリアもしぶしぶとそれを認めた。

「分かった　じゃあ今も喋ってたら危ないなあ。また後で1年2組で待ってるから！ほな、さいなら。」

グロリアはそう言うと前を走り、校舎の中へと入っていった。

そう、今の時点でグロリアと関わっているとペルマは勿論の事だが、  
…周りの目線も気になる。

こうやってまた2人で歩いていると恋人が何かと勘違いする輩がいる。今、そうなると後がややこしくなる。

なので極力関わるところを少なくしよう、とレインは自分なりに考えたのだ。それからもう一つ。

…普通に喋っているが、あいつは一体どうして”レインの表裏”を知っている？最初にピーニヤに言っていた言葉にも、

”その人にはあんさんの行動ははつきり見えてはりますから”  
と言っていた。そして、現在も表裏について何も問うて来ない。それどころかこの部活に自分から入ってきたのだ。

「グロリア・ファラム。俺と同じ部類に属する謎深き多い女。  
…面白い。」

裏のレインも真実を話さないところから、まだ分かっていない模様だな、と表のレインは思った。

それにしても裏のレインが”面白い”と言うときは、人を倒す時ぐらいなのに、今回意外にもグロリアに喰いついている。

何故だろうか？表のレインにはそれがまだ分からなかった。

とにかくレインは次の仲間候補である”ジャック”という男を入れる為に、自分の教室に着いてかばんを降ろすやいなや、1年2組に行った。

無論、この時のペルマはまだショックが大きかったため、レインの行動なんか気にしていられなかった状態だ。

1年2組に行くと早速グロリアが近づいてきた、そしてすぐさまジャックを指差した。

「あの人ジャック・スキップって言うねんでえ。」  
そのジャック・スキップは怪我をしていた。顔にガーゼがあるのだ

が表のレインにはその時の記憶がないので、どうやって戦ったのかは分からないのだ。

ちなみにその時”性格の分岐点”で裏のレインがすぐにジャックの顔を見たが、興味無さげにまた身を潜めた。なので、何も教えてくれない。

とりあえず昨日の裏のレインがしたことに関して謝罪しようと、表のレインは思いジャックに近づいた。

すると突然、ジャックがレインの前にチョップするような形で手を振り下ろした。しかし、レインは興味無さ気に簡単に片手で止める。

「流石レイン殿。お見受けした通りの男だ。」

「…昨日は怪我を負わせてすまなかつたな。」

「否、むしろ拙者の方が主に救われた。拙者は、悪いと分かっている。でも力が強いピーニヤについていかざるを得なかつたのだ。」

しかし、主がピーニヤを倒してくれて、ついに善と呼べる者に出会えたのだ。大変感謝している。そこでその”なんでも部”に入部したい。」

「そのクセに先制攻撃をしかけるとはね…いいだろう。」

とレインは苦笑いをする。それにジャックは答える。

「レイン殿が本物であるかを確かめたのだ。すまない。」

これでジャックの入部が決まった説明も終わった。後はペルマの親友マリア・マドレーヌとなっただけである。

そこでようやくマリアの口が開き、ペルマに話しかけた。

「ペルマさん、突然驚かせてごめんなさい。私、ペルマさんを元気付けたいと思ってこの部に入部する事を決めたの。」

「でも！マリアさんは病気で、こんな所にはいてはいけなはずじゃ…？」

ペルマの言う通りならマリアは今にも倒れてしまふ可能性だってある。しかしマリアもレインはそれに首を振った。

「いいえ、実はもう治ってるの。」



「どっ…どっいう事…？レイン君が直したっていつの？」

「さてっど、ここからはマリア・マドレーヌの”真実”お話ししますよ。」

そしてレインは最深部にあたるマリアの真実を先程のジャックの続きから話し始めた。

依頼 No. 4 (後)

とにかく、これでジャックの入部が決まった。とりあえずジャックに部活説明の紙を読ませ、そして先程グロリアにも言ったペルマに関する注意事項を言った。

「そうか。それなら何かペルマ殿を戻すような策は考えておるのか？ そうしなければペルマ殿の帰る確率は低くなるぞ。」

確かにジャックの言うとおりだとグロリアも気付いた。すると待つてました、とでも言うようにレインはフツと笑った。

「そこでだ。ペルマの友達の誰かをこの部に入部させたいと思う。」

「そっか！ 流石レイン君やなあ。」

グロリアはレインを褒める。しかし、そこにさらにジャックが突っ込む。

「ではペルマ殿の友人は一体誰だ？ 今ペルマ殿と関わると、先程の内容とは矛盾してしまうぞ。」

ジャックは鋭いところまで突っ込む。レインもそこまで考えてなく、うーん…と考え込む。すると今度はグロリアが提案を出す。

「ほな、バレない様に尾行したらええんちゃう？ そしたら関わる事はなくなるで！」

「でもそれをしたらストーカー行為で疑われるだろ？」

そこはレインでも気付いた。ここで誰かが変な事を起こして、折角結成される”なんでも部”を潰したくはない。そこでレインはもう一つの考えに辿り着いた。

「ちょっと難しいかもしれないが…それぞれのクラスで聞き込み調査をして欲しい。ただしこれも内密にだ。」

それにはジャックも頷く。

「そうだな、一番早くバレずに済む方法だな。」

ここからはレインは思いつく内容を話し始めた。まずはペルマの友人自分のクラス中心にして探す。つまり2人と2組になる。

その際に”同じ小学校”というのがキーワードになるだろう。それを糧にして女子に聞き込みをする。

最後に必ずペルマに内緒にしておく事を約束させる。

ただ約束させても言う輩がいるかも知れないから「入学祝いを内緒で贈りたいから」とか何か言って誤魔化すのが一番良い。

そこまで話すと二人はそれを承諾し、作戦を決行した。あとはマローネにも同じ事を言わなくてはならない。

そこでレインはすぐさまマローネの教室1年1組に急ぐ。そしてマローネの席まで来るとすぐさま状況説明をし始めた。

まずはピーニャ・コラーダの件、ペルマが裏のレイン事情で部活をしばらく休む事、それに関する注意事項、

グロリア、ジャックの入部、そして最後は1組にペルマの友達がいるかどうかを調査するように頼んだ。するとマローネの口から意外な答えが返ってきた。

「僕、知ってるよ。ペルマさんの友達でしょ？それならマリア・マドレーヌさんだよ。」

「知ってるのか!？」

「うん。小学校の一時期、付き合ってたでしょ？その時によくマリアさんを見たよ。今は確か…2年3組だったと思う。」

「案内してくれっ!」

レインはこうしてまたすぐさまマローネを引き連れて、マリアのいる2年3組へ急いだ。あと10分ぐらいで1時間目の授業が始まるからだ。

2年3組に到着次第すぐにマローネはマリアを探す。しかし、マローネの目にはマリアが映らない。いや、いない。すると近くにいた親切な女子が2人に声を掛けた。

「1年生？」

「あつ、はい。」

レインはそう答える。マローネもうん、と頷く。

「誰か先輩を探してるの？」

1年生が来る目的と言ったら、新しく部活に入って、その部活の先輩に何か用事がある時ぐらいしか推測できない。

ただ単に2年生の教室の周辺をうろろするというのはおかしい。

先日のレインとエルダーの様に絡まれる恐れもあるのだから。

だからその女子生徒の質問は”先輩を探す事”に決まっていたのだろう。それに今度はマローネが答えた。

「はい、マリア先輩なんですが…」

「ああ、あの子！今は病気で病院にいるわよ。」

『病院！？』

それには二人に衝撃が走った。体調不良じゃなく、最早入院沙汰とは大きな病気、怪我となる。

「ええ。何か彼女結構重い病気にかかってるらしくて…しばらく学校に来ていないの。」

「そうですか…」

マローネは落胆する。こうなると今すぐには勧誘は不可能だ。と言うよりも重病の彼女を”なんでも部”に誘うなんて事自体が無茶である。

諦めたマローネが”レイン君帰ろうか”って言おうと思ったときだった。

「じゃあ、もしよろしければその病院の居場所を教えて貰えないでしょうか？」

「この近くの大病院よ。知ってる？あそこの307号室よ。」

「ああ！あそこの病院ですね！どうもありがとうございます。」

その行動にマローネはぽかんとしていて為す術が無かった。レインは本気でマリアの所へ向かうのだ。

レインはその女子生徒に丁寧にお礼を言ってから、マローネとすぐに教室に戻った。その帰り際…

「レイン君！マリアさんは病気に掛かってるんだよ！いくら何でも病人を誘うなんて無茶だよ！」

流石のマローネでもレインの行動はちょっと酷いと思った。しかし、レインは首を振る。

「まだ誘わない。せめて話だけはしておきたいんだ。」

レインはそう言うと、マローネと別れ1年3組の教室に帰っていった。

マローネもレインにそれ以上は何も言わない。ただ彼を信じるしかなかったのだ。

その後の授業中に裏のレインが性格の分岐点で表のレインに話しかけてきた。

「…何を企んでいる？」

すると表のレインはゆっくりと欠伸をしながら答える。

「病気を治して是非とも仲間になりたいなあーって。ペルマも連れ戻したいし。」

「病人は病人だ。役になんか立つかよ。治ったところで名前が”病み上がり”になるだけだ。しかもそいつの友達は何にもいる。無駄な時間を費やすな。」

すると、性格の分岐点でどこか遠くを見ていたレインが、ふと呟く。「俺が欲しいのは力のある奴だけじゃない。個性のある奴が欲しいんだよ。」

それにしびしび裏のレインは”勝手にしろ”と言ってその場を去った。今回は表のレインの勝ちのようである。

そしてまたレインはゆっくりと1時間目の授業を聞き始める…

休み時間、また1年2組を訪れてグロリアとジャックに事情説明した。

マリアというペルマの親愛なる友達がいること。そして彼女は病人で、現在は入院している事。

勿論2人は彼女が重病である事よりも”病院に行くから”と発言したレインの方に驚いた。しかし、2人は何も言わずレインの指示に従った。

新入りである自分達が創設者であるレインにあまり反抗するのは良くないと思ったからだ。中1でも2人なりの考えがあるのだ。

さて、放課後。レイン・マローネ・グロリア・ジャックの4人は頃合いを見計らって、集合し早速2年生の女子が言ってた大病院へと向かった。

大病院は学校から歩いて十分ぐらいのところにある。”大病院”と言うものだからここら辺りの病院で最も大きく、医療技術も最も発達している。

病院は何棟かに分かれていて、入院患者は勿論、高齢者も多く棟に住んでいると言っても過言ではない。

レイン以外の人も勿論病気などでこの病院には何度もお世話になっている。なので道もよく知っていた。

道中、とりあえずマローネとグロリア、ジャックが初顔合わせだったのでお互いに自己紹介をした。

そしてマローネがお金持ちの息子である事に話が盛り上がったたり、不思議なグロリアに色々質問してみたり（的外れな答えばかりだったが…）。

レインも話に参加して、十分を有意義に過ごした。

あつと言う間に時は経ち、既に大病院の前に到着した。病院の正面はガラス張りなので中が少し見える。今日も患者が多く見られる。そんな中レインはある人物を発見した。

「ペルマ!？」

そう確かにペルマはいた。受付にいて看護婦さんに話しかけている。勿論目的は…

「ペルマもマリアさんに会いに来たんだね…」

とマローネは少しガツカリしながら言った。

「ペルマちゃん、タイミング悪いなあー。」

「こうなったらペルマ殿が話し終わるまで、ここで待機するしかありませんな。」

ジャックの提案で近くの病院が見える喫茶店で待機することにした。こんな所で足止めを喰らい、一杯の飲み物にお金を費やすとは予想外だった。

しかし、ペルマ本人が彼女のところに行くという事はお見舞いか。そして今日は多分そのついでに昨日の事を相談できれば相談するだろう。

…マリアという女性がレインの表裏の存在を信じてくれるのであれば。しかしともかくペルマが出てこなければ、自分達が動けない。仕方なくレインはしぶしぶ、マローネの待ち伏せをしている時にも使ったゲームで暇を潰していた。

それを見て、それぞれも暇を潰すあてを探す。

「レイン君、私が見張りに言ってこようか？ウチならちょっと病院内もつろつけると思うしー」

「おっ、そうか。悪いな。」

グロリアはそう言つと早速喫茶店を後にし、病院へ向かった。するとそれをみてジャックも立ち上がる。

「…ジャックも病院へ？」

「否、拙者は少し外で修行をしてくる。じつとしている暇があれば修行がしたくて。」

「了解。グロリアが戻ってきたら呼ぶから近くにいろよ。」

「御意。」

こうしてジャックも外に出てきてしまつて、残るはレインとマローネのみだった。するとレインはゲームをしながらマローネに尋ねた。

「お前、結局ペルマとはどうするつもりなんだ？」

そう聞かれたマローネは少し顔が赤くなつたのがレインには分かった。そして少し恥ずかしながらもしぶしぶ答えた。

「…僕は今この部活で彼女と一緒にいられるだけで十分幸せさ。幸い彼女も僕の事を一応迷惑がってないし。でも、もう一度振られたんだ。男なら過去はしっかりと捨てないといけないと思うんだ。」

いつまでも彼女の背中を追ったって、彼女も嫌がるし僕もこれ以上の成長は無いと思う。だから”想う”だけにした。それじゃ駄目かな？」

以前のマローネの口からはこんな言葉は出なかっただろう。レインはそのマローネの言葉に”ハッ”と鼻で笑った。マローネは”やっぱり”と思った。

「やっぱりおかしかった」

「お前がそう想ってるなら想い続ける。ただ、その”思い”も”想い”もこれからも忘れるな。」

レインの言葉にマローネは驚きながらも頷く。そして”この部活に入って良かった”とこの瞬間心から思えるようになった。

レイン君、ありがとう…と感謝の意を心の中でボソリと言ったマローネだった。

するとレインは急に持っていたゲームをマローネに見せた。

「お前もゲームするか？」

「えっ？でっ、でも僕ゲームなんか…」

「なーに簡単さ！操作方法教えてやっからやってみな！」

こうして喫茶店の一時はレインとマローネだけでゲームをしながら楽しく過ごした。

それからしばらくして…ちょうどマローネがゲームに慣れてきた頃だろうか。

「レイン君！ペルマちゃん帰ったでえ」

グロリアの報告で2人もゲームを止め、早速動き始めた。急いで喫茶店を出て病院に向かう。

「ジャック！行くぞー！！」



レインの一声にどこからかジャックが出てきた。少し疲れた顔をしているところから、ずっと修行をしていたんだらう。努力家だな。と少なくともレインは思った。

さて、4人は病院に入り”マリアさんのお見舞い”と言い、受付を済ました。そして向かう、マリアのいる307号室へ…

レイン達は部屋の前に来ると室番と名前を確認する。

”307号室 マリア・マドレーヌ”

確かにマリアだ。それからノックを二回して部屋に入った。

「失礼します。」

すると窓の外に目を向けていたマリアがコチラを見た。一番に目を向けたのはその身体の細さだった。

重い病気だからか、身体がやけに痩せている。

それを見て普通の人々は「可哀想」とでも言うのだろうか、それは一生懸命病気と戦っている病人に対して失礼な言い方だとは4人も知っていた。

…髪は長く背中あたりまで伸びていて、それは背中あたりで一つにくくられていた。

顔は表のレインから見ると”綺麗”だと言う。美貌があるじゃなく、ただ単に綺麗に出来ている顔と言うべきか。

薄いクリーム色のパジャマを着ていて、布団をお腹のところまで被って、後は身体を起こしていた。

「あら、見たこと無い顔ね。一体どなた？」

「突然の訪問、大変失礼致します。私の名前はレイン・カンダクゼノス。先日踊祝中学に入学した一年生です。」

”女性に対する配慮”と”病人に対する配慮”と”年上に対する配慮”でやけに礼儀正しい言い方になっている。

するとマローネがレインの前に出てきてマリアに挨拶する。

「こんにちは。僕です。ペルマさんの元恋人だったマローネ・ベル

カスです。」

マローネの顔を見るなり、マリアははっと思い出した顔でマローネを見る。

「あなたは…マローネ君ね。ペルマさんからは話を聞いていたわ。

”元恋人” って事はもう別れてしまったのね…」

「ええ、でもこれは僕のせいです。マリアさんにもご心配をお掛けしているようなら申し訳ありません。」

マローネは真摯にマリアの言葉を受け止め、その場でゆっくりと頭を下げた。

”男なら過去はしっかりと捨てないといけないと思うんだ。”

つい数分前のマローネの言葉を思い出したレイン。これも以前のマローネならきつと言わなかっただろう。

それはマリアもレインと同じ事を思っていた。そして話す。

「昔と少し変わったわね、マローネ君。そして別にペルマさんは先程もマローネ君の話には触れていないからきつと大丈夫よ。」

その言葉に対してマローネは少し嬉しそうだった。レインはその時”ペルマは先程マリアのところに来ていた”というのを今の言葉で確信した。

そこで、いつまでもマローネと回想話をしては失礼だと思ったマリアは話を戻す。

「…という事はこの方達はマローネ君の知り合いって訳ね。」

「これは一応私が今作り上げている”なんでも部” っていうメンバーです。」

とレインが言うと、いつも持っているあの部活紹介の紙をポケットから取り出してマリアにも見せた。

「なんでも部、名前の通り、何でもする部活。ただし依頼主の依頼から成立される。表面上では先生がたの依頼を無償で引き受ける。

例えば考えているのは校外学習の実行委員役や体育祭、文化祭、その他の行事の準備、後片付け、それ以外でもお手伝い出来る事があ

れば何でも。しかし、裏の活動は違う。依頼主は先生では無く生徒、そして依頼は可能な限りどんな事でも行う。中一で命の危険性は無いと思うが、それぐらいの覚悟も時には必要となる。勿論裏の仕事内容は完全極秘で誰にもバラしてはならない。そして、依頼が完了すればそれに値した報酬をもらうシステムとなる。」

わざわざ丁寧に MARIA は声に出して読む。そして読み終わると、紙を折りたたみレインに返す。

「今のこの時代にこんな”改革”めいた事をするなんて面白い人たちね。それで、もしかして私を勧誘しに来たの？」

紙を受け取り、ポケットにしまいながらレインは頷く。

「残念だけど、私はこの体。重い病気に掛かっていて、部活をするのも歩く事さえままならないの。」

するとそこで一旦 MARIA は言葉を止める。それならそこまでの事情を知っていて、この病院に来るはずがない。

それじゃあ一体このレインの目的は…？と MARIA は思いまた話し始める。

「目的は一体何？」

「MARIA 先輩の勧誘です。理由はペルマの為、その事はもう先程聞いているでしょう。私の…」

『表裏の性格。』

MARIA とレインの声が一致した。これでペルマがレインの事を話し相談しに来た事も 4 人の中で明らかになった。

最も、マローネとジャックにとってはまだはつきりとは掴めない事実だったが。

「レイン君、あなたは一体…」

「ちょっと待ってください。とりあえず私も色々急いでいるんで、もう1つだけ喋っていいですか？」

「えっ、ええ。いいわ。」

そしてこの後レインは衝撃的なことを喋る。それは3人にとっては驚く話であり、マリアにとっては真実を暴かれた事になる。それは…

「マリア先輩の重病、すぐに治せるでしょ？」

「…!？」

しばらくの間、沈黙が走った。レインの言った事は理解出来たが、それなら何故ここにいるのか…？

「FALSE TREATMENT ILLNESS、フォールス・トリートメント・イルネス、と裏では呼ばれる病気。その名の通り”偽物の治療法の病気”だ。

治療法はあるのに、それが表上では無いと言われているんだ。その目的は様々。まあ”世間からの隔離”って理由が一番多いが。

実際のところはとある薬を使えばすぐにでも治ると言う。後遺症も何も残らない。対したことのない病気だ。」

真実を堂々と暴かれて啞然とし始めたマリア。額には汗をかき、手は強く握り締められている。

「別に俺の表裏の性格についてはある程度まで喋っても問題は無いですが、このマリアさんの病気は流石にヤバいでしょうね。」

これはある一種の脅迫のようにも見えてきたマローネ・グロリア・ジャックの3人。

しかし、今の状況では隠していたマリアに問題があるので、むやみに3人がレインに意見する事は出来ない。

レインはこれを知ってわざわざこの病院に来たのか、とようやくレインの”本当の目的”が明らかになった。

実はレイン自身もこの事に関しては必死だった。ペルマが部活に帰ってくるための”餌”としても重要だが、それ以上に重要なのがこのマリア本人。

ペルマの友達なら誰でも良いのであるのだから、わざわざ重病者であるマリアに絞る必要は無い。

レインがマリアを求める理由は3人は勿論の事、まだマリア自身も

分からなかった。分かっているのはレインのみ。

そこでマリアは諦めの溜め息を吐いた。”降参”ということだろうか。そして口を開く。

「私の依頼、出来たら仲間に入れてもらえるかしら？」

「上等。」

レインはマリアに不気味な程の笑みを浮かべた…

依頼No.5に続く

## 依頼 No. 5 (前)

「それにしても、私の病気を知ってる人間が、私以外にいたなんて驚きよ。どうして分かったのかしら？」

マリアはふっきれたようにレインに問いかける。

それに対して、レインも先程の緊迫した顔から表情を元に戻す。

「そうですね：今現在で”原因不明の不治の病”と言われているものの多くが、裏の世界ではこの”False Treatment Illness”通称”FTI”であると言う報告があるんですよ。だから、その病気がどうか鎌をかけてみたのです。騙す様な事をして誠に申し訳ありませんでした。」

口調も配慮を考えた丁寧なものに戻る。真実が知る事が出来てひとまず安心したという解釈でいらしい。

そしてマリアもこのFTIがバレて、ようやく全てを話す覚悟は出来たのだろう。

今まで隠してきたマリアの”真実の真実”を

「まずは依頼に関してだけ、このFTIを治す”薬草”を採って来てもらいたいわ。」

その依頼内容の簡潔さにレイン以外の三人はほっとした。

何だ：こんな不治の病を治す薬がただの薬草か…。

「それならこの僕でも出来そうですね、レイン！」

マローネはようやく自分も役に立てると思ったのだろうか。嬉しそうな顔でレインに話しかけるが、レインはそれには笑顔で答えられなかった。

「残念だが、この病気もただの病気で無い様に、治療用の薬草もタダモノではないんだよ。」

それに付け加えるようにマリアが口を開く。

「そう。この薬草が生えている場所はこの近くにある”呪われし森

”よ。”

「何と。あの”呪われし森”かつ…!？」

流石のジャックもその名前を聞いて絶句する。

呪われし森とはこの近くに住む者なら誰でも知っている、不思議で危険な森の事である。

「呪われし森に入った者は自分で出る事は出来なくなる。」

その理由は不明だった。人は夜な夜な森を暴れ周り、数日後には森の外で疲労困憊で気絶して帰ってくるという噂だけであった。

そして命に別状は無いのだが、この森は都市伝説の様に「神が人を夜な夜な操っている」と噂が広がっている。

まさか…その正体が”草”とは驚いたものである。

更にレインが調べた資料とマリアの話は一致していた。

その草は特殊な成分で出来ている事には言うまでも無かったが、その効果としてマリアの様な脆弱な人間でもすぐに元気になれる。

そんな草であるからに近寄るだけで気分がおかしくなり、普通の人間でも一時間は耐えられても、それ以上いると暴走を開始し、所謂猛獣化してしまう。

それが”呪われし森”と呼ばれる理由であるが、いまだそれははっきりと知らされる事はない。

レインの言った様に、世間からの隔離でこの病気になる人はこの事を知る。

現代社会には世間からの隔離をしたい人間なんて溢れるほどいる。

そんな人たちの社会復帰できる草を乱獲され、悪用されても困る。だから単純に表面上では未だ謎に包まれし物として扱われている。

「効力ははっきり見えるから、周囲の動植物の様子を見ればその草の在り処が掴めると思うわ。その分、気を付けないといけなけれど…」

とマリアは言うが、肝心な「FTIになった理由」が分からないと一体レイン達が何の為に採りに行かなくてはいけないのか分からない

い。

そこで最初にジャックが尋ねてみる。

「マリア殿、どうして貴殿の様なお方がこの病気に自らなられたのでしょうか？」

すると、彼女にそぐわない様な答えが返ってきた。

「…学校が嫌になったからよ。」

大体の理由はその辺りになるだろうと予測は出来ていたが、こんなに美しい人が何に悩むのだろうかと思う。

「そんなに綺麗なんやからクラスの男子の人気者ー！とか女子の憧れー！とか、そんな感じちゃうのー？」

「いいえ。私はただの”お嬢様”よ。」

お嬢様 言葉だけ見ると別にマイナスの要素は含まれていないが、マリアの言葉にはやたらトゲのある様な気がした。

「…続きを聞かせてもらえますでしょうか？」

とレインが促すと、マリアは一呼吸置いて、窓の外を眺めながらゆっくり話し始めた。

「学校の友達はお嬢様という存在だけで私に近寄ってくる。私の地位に憧れて近寄ってくる。それは最終的にモノ欲しさに近寄ってくるだけだったのよ。お嬢様だから欲しい物は何でも持っている。だから、それが欲しいと駄々をこねてくるの。買わないと友達にならないと言うし、買ったら買ったでまた次の物が欲しくなる。永遠の悪循環ね、笑ってしまうわ。」

…結局私の周りにいた友達なんて嘘偽りに過ぎなかった。私に本当の友達なんて作れはしなかったわ。ただ私はみんなと仲良くなりたいただけなのに、そんな友達じゃ誰だって信じられなくなるでしょ？だから私は学校が嫌になった。

そして親にバレずに自然に学校に行けない方法を探したら、偶然この病気を見つけたのよ。重い病気でも、その草さえあれば治せる。今はどうすればいいのかわからないから、この病気になればゆっくりに考える事だって出来る。それに…本当の友達なら、私を心配して



お見舞いに来てくれる。そう、ペルマちゃんのようにね。そんな他愛の無い友情だけで私は十分なの。それ以上友達はいらないわ。…マリアという神は学校という穢れた場よりも、病院という神聖な場の方がお似合いね。」

最後の言葉に口元は笑っていたが、目元は全く笑っていなかった。その話は経験したことのない人間には重くのしかかってくる話だった。何か特別なだけで、それを利用してしまふ恐ろしさ。そんな関係は決して「友達」とは呼べない。

しかし、未だに「友達」なんて軽く言葉を吐いて、自分の思いのままにしようとする人間はこの世に溢れんばかりいる。もしかして我々だって悪気が無くても、友達という立場を悪用しているのかもしれない。そんな中でもマリアは「お嬢様」という身分であるから、いつそうその苦しみを受けている。それは難しい、決してすぐには解決できない話。目に見えない闇の話である。

「でも…それは自ら乗り越えなくてはいけない問題だと僕は思いません。」

と返したのは、「同じ」お坊ちやま”としての立場に立つマローネだった。

「僕もかつてその事に悩んだことがあります。でも大事なものはお金なんかじゃない…大事なものは友達になろうと思う互いの心ではないでしょうか、マリアさん。」

その言葉にマリアは一瞬はつとしたが、すぐに顔が落ち込み始めた。「私だつて思ってたわ、心から信頼できる友達が欲しいって。でもその思いはことごとく砕かれてしまったわ。私はこれ以上誰かに利用される人間なんて嫌よ…！」

「じゃあ、まずは我々を心から信用してくれませんか？」

「えっ？」

マリアはレインの突然の言葉に驚いた。そして今度はその顔は暗い顔に戻らなかつた。

「今からマリアさんの依頼を”必ず”こなして来ますので、そして我々の友達になってください。そして我々の”なんでも部”に入部してください。」

と自信を持ってレインは約束をした。果たしてその自信はどこからやってくるのだろうか。それともただのハッタリか。しかし、レイン以外の三人はレインの思考を何となく分かっていた。

コイツ、単にワクワクしていて早く行きたいだけなのだろう、と採取する専門家でも苦勞するというのが…しっ、素人であり中学生の貴方達では到底出来ないわ。」

「まあまあ。とりあえず信じて待ってくださいよ。」

「それに”到底”という言葉は決して可能性が無と言っわけでは無さそうですね。」

「マリアちゃん、大船に乗ったつもりでウチらに任せとき！」

と三人もレインの言葉に押され、それぞれの言葉でマリアに約束を告げる。マリアもそこまで言われて、返す言葉がなくなったのだろう。

「…もし採って来てくれたら考えます。」

と言ってくれた。ようやく依頼開始である。

「レイン君。」

「はい？」

「貴方は一つ勘違いしているわ。」

「？」

この言葉にレインは首を傾げた。どこを勘違いしたのだろうか？

「貴方はさつき”後遺症も何も残らない。対したことのない病氣”と言ったわね。残念ながらこの病氣は重病扱いであるが為にこんな身体になってしまう。これが唯一の”副作用”であり、この副作用が長く続くと命を落とす事だつてあるわ。だから私の命も治さない限り、そう長くはないわ。」

「そうですね。それならば今すぐに治しますから関係の無い情報で

したね。」

別にレインとしては挑発するつもりは無いが、本当に必要の無い情報だったのでそうあしらってしまった。その代わり、

「ならばマリアさんのしている勘違いのヒントも一つ申し上げましょう。」

と言った。どうせなら部屋を出る前に言おうと思っていたので好都合だった。

「何かしら？」

「マリアさんは『マリアの七つの悲しみ』というのをご存知でしょうか？」

「…知らないわ。」

「そうですか。自分の名前なのに知らないのですね。それは残念です。」

そのレインの表情は本当に残念そうな顔だった。そう。マリアの七つの悲しみは貴方の悲しみとは比べ物にはならないのに

依頼 No. 5 (中)

マリアと別れてから数時間後。レイン達四人はあの呪われし森の入口に立っていた。

呪われし森…その正体が”FTIを治す草”とは分かっている、何かしら異様な雰囲気をかもし出しているのがひしひしと伝わってくる。日の光が地に当たらないほど木は生い茂っていて、夕日が眩しくても森はただの闇にしか感じられない。カラスが森の上を飛んで通過している。賢いカラスも分かっているようだった、この森には近づくなということが。もう日はだんだん沈んでいる。日が沈む前にこの森から草を採取しないと森は更に暗くなり、更に不気味さを増してしまう。

そうなるとこの森に迷ってしまう。  
抜け出せなくなってしまふ。

そして草の餌食になってしまう。  
それだけは御免である。

そこでマローネの財力を活かして簡易酸素マスクとボンベだけは用意させてもらった。”草”の強烈な臭いに耐えるにはこれが妥当であろう。しかしそれほど長く居座らないのと、「金より心だ」と言っときながらあまりマローネの財力を使いすぎるのはどうかと思、それほど大きなものは用意しなかった。別に最初から装着するのでは無く、途中で気分がおかしくなったり、周囲に異変を感じたら付ければいいだろう。それと…もしもの時に素早く動けるためにも、後は懐中電灯・地図・方位磁針・見つけた事を知らせる打ち上げ花火・草を詰める空ビン等は各自最低限に用意した。

森を散策するのはマローネを除く三人。マローネは外から援護を頼んでもらい、もしもの時があった時に呼んでもらう。その為にマローネから無線機が渡された。携帯電話ではないということがなかなか

か本格的である。

「これでもしもの事があつた場合は連絡して欲しい。それから今から三時間経つて出てこなかったら、我が家の特殊部隊を呼んで捜索してもらつことになるから、なるべく早めに出てきてね。…とレイン君からの指示ね。僕には流石にここまで思いつかなかつたよ。」とマローネは言う。

それにしても。ベルカス家の特殊部隊とはそこはマローネに流石と言いたい。警察を呼ばれてややこしい事にならないのが安心する。

いや、その前に出て来ないとレイン達自身が色々ややこしくなるが。「そうだな…草を発見出来なくてもある程度時間が経てば捜索を中止してもらいたい。」

「御意。」「りょーかいしましたー」

そして三手に別れて、早速草の捜索が始まつた。

ジャックはそんな病があるとは知らなかつた、いや知る由も無かつた。そして自分に課せられた最初の依頼がただでは済まされない薬草採り。

レインは最初に「ペルマの友人を誘い、ペルマを部に戻す」と言つたが、果たしてここまでしなくてはいけなかつたのだろうか。別にペルマを入れなくても、レインの力なら他の人だってなんでも部に入部させる事だって出来るし、ペルマの友達と言つてもマリア一人だけでは無い筈。ならばどうしてレインはこんな危ない道をわざわざ選んだのだろうか。明らかにペルマとマリアを入部しなければならぬ理由がレインにはあるらしい。

ではその理由とは？…残念ながら今のジャックにはそれが全く分からない。でも、現に学校に行けないマリアを学校に行かせようとしている。マローネだつて聞くところによれば、お金による曲がつた性格を直したというし、自分だつてピーニヤの支配から救つてくれた。

今までの行動を見て、別にそれをして悪いことはないし、むしろい

良い事だらけである。

ならば何としても草を見つけ、マリア殿を助け出さなくては…とジャックは思った。

ジャックは当ても無く森の中をうろろろしていた。しかし、滅茶苦茶に歩いているわけではない。彼は彼なりに、通った草木に木刀で傷を付ける事によってその足跡を残していた。

彼は普段、木刀を持っている。本物のカタナを持ちたいが、それは色々と睨まれるし流石に木刀だけでも怪しい。学校に行くときは木刀すら持ってこれないので、もしもの時は素手が箒で何とかしようと思っている。だからレインに初めて会ったときも素手で試したのだ。素手だと何も出来ない訳ではない。彼のような人間は素手でも十分対抗できるように訓練はされている。

しかし、やはりジャック自身は何かカタナのような物を持っている方が融通が利く。素手に比べて、カタナはリーチが長いし、自分の身体を傷つけずに済む。何より、カタナは”技”が使える事に大きな得がある。だから今回は木刀を持ってきたのだ。

森を歩き始めて、ジャック自身結構時間が経ったのではないかと思う。そこで時計で時刻を確認すると一時間は経っていた。残り二時間か…そう思っただけで歩き出そうとした時だった、変な感じがしたのがこれが例の草の臭いかっ…！！

そこで急いで酸素マスクと打ち上げ花火を出そうとリュックを降ろそうとしたが、それは出来なかった。理由は簡単だった。目の前に熊が立っていたからだ。普通の熊なら別にジャックの敵では無いが、様子が変わっている事をジャックは察知した。

「よく古典物語に熊は出てくるが…熊は昔から厄介であるな。」  
とりあえずこの熊を倒してからでないと、酸素マスクも打ち上げ花火も出せないようだ。ジャックにとっては別に構わなかった。どんな相手であろうとも、必ず勝つ。それしかジャックの頭には無かつ

ただだから…

その頃、レインも熊に遭遇していた。しかし、レインの出くわした熊は…

「…?」

既に誰かの手によって倒されているようである。となるとこの熊よりも強い何かか奥に潜んでいるということになりそうだ。

そう考えると、まずレインは倒れている熊の状況を確認した。どんな傷を負って倒されたのか。その状況を知ることによって相手の武器が多少分かる。

レインはすぐさま腹部にあった傷を見て、その武器が何であるかを把握した。

「…成程。それか、それに近い武器か。」

そして、更に奥へと進み始めた。

「何をチンタラ面倒な事やってんだ？早く戦わせろよ！」

と徐々に”性格の分岐点”で裏のレインが文句を吐いた。

「大丈夫、直に戦わなくてはならない時がやってくるよ。但し殺さない程度にね。」

表のレインはそう言って裏のレインを宥める。すると裏のレインが意味有りげに言葉を返した。

「殺してしまう…か。それはマリアに言わなくてはならないことじゃないか？」

「!?!…ふっ。何だ、君も気づいていたのか。」

「表が気づいて裏が気付かないとでも？邂逅の時点で分かったよ。」

「そうかそうか。ごく僅かな情報だったから、その信憑性を疑ったけど、君が言うにはその情報は正しかった様だね。良かった良かったー！」

…と表と裏はマリアについて謎めいた言葉を交わす。一体マリアの何について語っていたのだろうか？それはこの表と裏のレイン以外

は誰も知る由も無い。

「そついえば、ここは”呪われし森”なんか言われているけど、踊呪中学”の『呪』もこれと関係あるのかなあー？」

「そんな話、興味無し。大体テメエの話はいつも長つたらしい」裏のレインが表にとつと文句を言つて性格の分岐点を後にしようかと思つたその時、何かがやってくる音に気付いた。そこでレインは素早く身構えた。きつとそれが先程の熊を倒した犯人なのだからカサリ、カサリ…

草の擦れ合う音がだんだん大きくなってくる。音の方向から目の前の草の茂みの奥にすることに間違いは無い。

カサリ…カサツ。

音が止まった。まだ相手の姿が見えていないのに？そこで油断するよりも警戒したレインの対処は正解だった。なぜなら、そこからいきなり相手はレインの胸元めがけて飛び出してきたのだから。頭からうつ伏せの状態で飛び出してきた相手は黒色の何かを手に構えながら襲ってきた。レインは既にその黒色の物体が何かを熊の状態から理解していたので、すぐさま避けた。

ドンッ！

レインの避けたすぐ近くから何か鈍い音が聞えた。攻撃。発射。発砲。イコール銃撃。どうやら銃の類で間違いは無さそうだ。熊の腹部にあつた傷も銃撃による損傷だった。しかし、穴は開いていない事からエアガンと考えて良さそうだ。けれども最近のエアガンは改造次第でいくらでも強化でき、殺傷能力だつて持つことは可能。その物々しさは熊の傷跡からも語れるし、今の銃撃音の鈍さからも伺える。一体そんな銃を誰が所持しているのか…と考えたかったが、相手はレインのその暇を与えさせてはくれなかつた。

何ともう片方の手からも銃が出てきて、避けたばかりのレインに発砲したのだ。最初の銃撃を避けたとはいえ、まだ相手の至近距離にゐることに変わりはない。レインは空中で体勢を崩しながら銃撃を



避けたが、それでも横っ腹を掠めてしまった。

「…クッー！」

レインはそのまま横回転で地面を転がり、相手はでんぐり返りの要領で縦回転に転がった。

自分を殺そうとしているぐらいなら…:と思い、今回の表のレインはすんなりと眼帯を右目から左目に移した。

「俺がそんなおもちゃの銃でやられるかっての！…:本気でかかってきやがれ！」

裏のレイン、覚醒。

裏のレインは立ち上がって、すぐさま相手の顔を確認した。すると相手も二つの銃口をこちらに向けたまま立ち上がった。

「ケッ！またお前みたいなぜコキヤラかよ！」

と裏のレインは悪態をついた。何故なら、今回の相手は…:

ピーニヤ・コラーダ。

そう、裏のレインはこのピーニヤとつい何日か前に闘ったばかりの相手なのだから。そしてその時の結果は裏のレインの圧勝。ピーニヤはボロボロになって帰っていったのだから。

そのピーニヤが場所を変えて、また目の前に立っているとは裏のレインにとつては何とも馬鹿らしい、阿呆らしい、無様で滑稽な光景に過ぎなかったのだ。

しかし、レインの悪態に対して、ピーニヤは一言も喋らない。身体はフラフラ、でも目はギラギラ。それは明らかに前回のピーニヤとは違った雰囲気である。

「もしかして既にこの近くには例の草があるみたいだね。ピーニヤの様子が変だし、闘い方も前よりかよく動かし、頭のキレもちょっと上がっているみたいだし。…:という訳で、裏のレイン君にひとつ忠告をしておく、早めに酸素マスクを装着してね。さもなれば、君が凶暴化したら誰にも止められないし、最悪この森が無くなっちゃうかもねー！」

とせ”性格の分岐点”で表のレインは裏のレインに注意した。

「ザコキャラは能力が上がったところでどーせザコに過ぎない。ボスにはならねえんだよ。」

そのまま永遠のザコとして眠っとくんだな。」

裏のレインは表の忠告を半分無視するような形で、そのままピーニヤに突っ込んでいった。

無論、直進では無く左右に移動しながら間合いを狭めていく。ピーニヤもエアガンを連発してくるが、レインの素早さにピーニヤの銃撃は当たらない。そしてレインはピーニヤの前を飛び、空中一回転させて頭を蹴ろうとした。しかし、

「何っ!?!」

いきなりピーニヤは回転しながらエアガンを乱射したのだ。そのせいで頭に狙いが定まらないし、乱射をしていてどこに撃つのが全く予想出来ないの、レインはその身を避ける事しか出来なかった。そのまま地面をぐるりと回り、地から跳ねる様にジャンプし、ピーニヤとの間合いを再び取る。裏のレインは少し笑い、そのまま横へ走り出した。

「くっくっくっ…そうそう。戦いは常に楽しくなくてはならないんだよ。能力アップしたのに一撃アウトじゃつまねえからな。」

すると裏のレインは近くにあった太めの木の枝を足で蹴り落とし、それを手に持ってそれをピーニヤに投げる。今度はピーニヤの足元に。

足に木の枝を入れることで、軸足のバランスを崩して、回転を止めようという考えか。だがそれでもエアガンが木の枝に命中し、ピーニヤの足に入れる前に既に枝が折れかけてしまうのだ。お陰で足に命中しても、回転の勢いから無情に枝が折れるだけである。

単なる偶然だろうとレインは見込み、同じ事を何度もやるが、木の枝にエアガンの弾が見事に命中してしまう。彼とて決して適当に撃っている訳ではないということもこれで確認された。

更に、疲れて止まるだろうと思っていた高速回転は一向に止まらない。流石例の草の能力である。いや、その草ももう間も無くして自分も飲み込まれようとしている瀬戸際に立たされている事も定かではあるが。

それでもレインは考える間も無く、既に次の行動に移り始めた。いや、別にもう考えはついていたと考えるべきか、全て本能で動いているのかは、裏のレインのみぞ知る。

ピーニヤの銃の乱射が止まる。先程まで木の枝を投げ続けていたレインの気配が急に消えたのだ。しかし、流石というかピーニヤは動じなかった。辺りをキョロキョロと見渡さない。逆に目を瞑り、邪念を捨てる事によってレインの気配を少しでも掴み取るうとしていく。そして両手の二丁拳銃はいつでもトリガーが引ける準備が成されている。

さあ、いつでも出て来い…

葉の擦れる音。自然の空気の流れが変わる瞬間。人が空を裂く音。上かつ！！

ピーニヤはすぐに上を向き、レインが落ちてくる姿を確認しながら両手の銃を発砲した。

この至近距離で撃てばレインだってひとたまりも無いはずだ。

この至近距離で撃てばレインだって避ける事は出来ないはずだ。

分かっている。そこにレインがいるのは既に分かっていたのだから。これで復讐は果たせた。レインは死んだ。俺は勝ったんだ！！

「二度も言わすな。お前の思考回路は小学生以下か。」

そう言われた時、ピーニヤにはレインの声なんて聞こえていなかった

た。自分自身の中で期待していたもの、完全予想していたものが一  
気に崩れると人とはこんなにも脆い者なのかと感じさせられる。

その意味は完全勝利とは裏側の完全敗北。既にピーニヤの首元はレ  
インの脚で締め上げられていた。

ピーニヤは呼吸も出来ず、そのまま首を絞められ、その場にドサリ  
と倒れた。

「所詮ザコはザコのまま。哀しい。哀れみを覚えるよ。」

レインはピーニヤのエアガン二丁を取り上げ、自分の鞆の中に入れ  
た。

「第一、『出現した所を発砲する』なんて素人。俺はハナっから避  
ける気満々だったんだよ。出てきて、お前が気付いた瞬間から発砲  
する時間なんて俺にとっちゃ永遠に等しい。そんな永遠の時間の  
中で避けるなんぞ容易い容易い。」

手をはたき、身体をはたき、草などを払いのけながらレインは言っ  
た。

「殺すとお前の学校が厄介になりそうだから気絶までにしておいた。  
感謝するんだな。そして俺にひれ伏せろ。」

そして最後に自分の眼帯を元に戻した。裏のレイン戦闘終了。

しかし、満足できねえー戦いばっかだな。もっと”あの時”みた  
いに俺をゾクゾクさせる戦いをくれよ。

依頼 No. 5 (後)

二時間後。

どういうタイミングなのかは分からないがレイン・カンダクゼノス、グロリア・ファラム、ジャック・スキップがほぼ同時に帰ってきたことが第一の事実。

三人それぞれがFTIの関する薬草を持ち帰ってきたことが第二の事実。

ジャックは少々の切り傷、レインは服に土と草の付着、グロリアに關しては行つた時とほぼ同じ状態で帰ってきたことが第三の事実。

「みんな一緒に帰還か？何か三人らしいと言えば三人らしいね。」

マローネは安心して三人を見渡した。帰還した三人も同じように自分達を見渡す。

「みなさんお帰りー じゃった？草は拾えたー？」

グロリアの問いにレインとジャックは薬草の入った瓶を掲げて答える。そしてそれに返すかのようにグロリアも薬草の入った瓶を掲げる。

本来は『三人の内、一人でも採取出来たら任務完了』だったのだが、これなら誰か一人でも良かった、むしろ誰でも良かったのだ。全く…色んな意味で恐ろしい三人だなとマローネは思った。

さて、これで薬草をマリアさんに持っていけば…と三人の瓶を回収しようとしたマローネに突如電話が掛かってきた。それは一応マリアの身に何かが生じた時に配属されていたベルカス家の者からだった。

「お坊ちゃま大変です！マリア様の容態が…」

「何っ!？」

マローネの慌てぶりから三人にも緊迫した表情に変わった。そして説明する間も無く、四人はマリアの病院へと急いだ。

呪われし森と病院へはベルカス家の車で移動した。運転手も連絡を

受けたからか、先程よりもスピードを飛ばしている。その車内でマローネがマリアの容態を説明してくれた。

「マリアさんはF T Iによる拒食症があった。それによる栄養不足がF T Iの変動に耐えられなくなって、今は危険な状況になっているらしい。もしもこの変動に長時間耐えられなくなると、マリアさんは死に至る可能性もあるらしい。」

そこでレインは数時間前にマリアの言った言葉を思い出した。

残念ながらこの病気は重病扱いであるが為にこんな身体になってしまう。これが唯一の”副作用”であり、この副作用が長く続くと命を落とす事だつてあるわ。だから私の命も治さない限り、そう長くはないわ。

「おいおいマリアさんよ。こんな所で死んでもらっちゃ困るんだよ！」

やり場の無い怒りにレインはただ拳を握る事しか出来なかった。

病院に到着すると医師たちが慌しく動いているのが目に付いた。その行き先は全てマリアの病室。明らかに危機が迫っている状況だった。

病室に飛び込むとマリアは顔を歪ませながら寝ていた。その口元には呼吸器が取り付けられていた。呼吸器が白く曇っては消える事を繰り返ししているが、そのペースが速いことからマリアが苦しそうだというのが伺える。

周囲には専属らしき医師の姿と、中年の男女がいた。きっとこの二人が両親だろう。

この両親はマリアの病気を知っているのだろうか。知っていても知らなくても此処に来るのは両親として当たり前である。

しかし質問を変えてみよう。この両親はマリアの苦しみを知っているのだろうか。この質問だけでこの両親が此処に来る意味が相当違ってくる。

それも分からない僕らが果たしてこつも簡単にマリアの病気を治し

てもいいのだろうか。マリアの病気を治した時点で両親はどんな反応をするのだろうか。それともマリアは両親にまで嘘を付いて生きていくのだろうか。

いや、そんな事はしないと。いや、そんな事は出来ないと思う。何故ならマリアは我々に誓ったのだから。神が人間に誓ったのだから。

人間が人間に約束したのだから。

だから私たちは何と言われようとマリアを助けます。必ず。必ず。

マリア・マドレーヌの”真実”、これにて終了。

レインはそう言ってペルマを見た。最早ペルマの表情は脱力感に満ちていた。ペルマはしばらく黙りこむ。そしてしばらくしてから口を開く。

「…マリアさん。これは本当の話ですか。」  
疑問というよりも確認。そんな問い方だった。

「ええ。レイン君の言う通りこれは”真実”よ。」

「そうですね…病気が治って良かったです…マリアさん…！」  
ペルマは棒読みでマリアにそう言った。しかし、その訳は五人とも分かっていた。ペルマは溢れ出る感情を必死に抑えようとしているのだ。そうして自然に、堰を切ったようにペルマはマリアの制服に顔を埋め、嗚咽する。

「どうして、どうして…マリアさん…ううっ…」

そんなペルマをマリアは背中にほっそりとした手を置き、さすった。病院に見舞いに来てくれたあの時の様に、マリアは慰めと感謝の意を記しながらペルマの背中をゆっくりさする。

「ペルマさん。」マリア”という名前はイエスの母の名前なの。そのマリアは生涯で”七つの悲しみ”と出会ったの。そのほとんどが息子イエスに関することだったの。預言者が息子の苦しみを予言したり、息子が突然居なくなったり…そして十字架に掲げられ殺され

たイエスの姿を見たマリアの苦しみに比べれば、私の苦しみなんかちつばけな物なのよ。だから私は苦しみを乗り越える。そう、ペルマさんとこの”何でも部”と一緒に私は生きていくわ。」  
それは治療を終えたマリアがレインから聞いた言葉だった。

「マリア」という存在は神と人間の仲介者でありました。そして人間的情愛に満ちた母でもあるのです。マリアさんならきつと本物のマリアになれると思います。いや、神の名の下に私は信じております。」

「それに”お嬢様扱い”が嫌やったら”お嬢様”の概念を覆したらええんとちゃう？協力するで！」

「まっ、我々は最初っから”お嬢様扱い”はしませんので。」  
それにマリアはうん、と頷いた。

最初は驚いた。自分のいた中学校にそんな革命家がいるとは思わなかった。それに自分の親友であるペルマが関わってるとは思わなかった。ましてやその部活に自分が救われ、入部するなんて信じられなかった。

「だから、私頑張ります。ペルマさん、一緒に頑張りましょう。」

「はい…はいっ！！！」

こうしてペルマの正式に入部する事が決定し、無事に”何でも部”が成立した。

「興味本位で入った女、ペルマ・ゲインズ。お坊ちやま、マローネ・ベルカス。謎多き少女、グロリア・ファラム。武士の心を持つ男、ジャック・スキップ。神の母、マリア・マドレーヌ。そしてその統制者がレイン・カンダクゼノス。全く…興味に尽きない部活だ。」

「だろ？結構有能な人材を集めたんだけど？それでも不満足？」

「ああ、大いに不満足だ。まだ誰も本当の事を知らないし、分かって無いんだからな。」

“性格の分岐点”で裏のレインは高らかに笑い声を上げる。



物凄く、楽しそうに。

- 依頼NO.6に続く -

阿修羅の巷番外編【ローリンガール】（前書き）

今回は番外編です。

「文学少女」シリーズより三題断

お題は【問題ない】【転がる】【もついいよ】です。

## 阿修羅の巷番外編【ローリンガール】

お題【問題ない】 【転がる】 【もういいよ】

酷い雨だった。

酷い雨だったんだ。

雨の中で転がる彼女は決して美しい愛とは呼べなかった。  
そんな雨だったんだよ。

彼女は運動場に呼び出された。

付き合っている彼の命が欲しければ運動場に来い、と言われて。  
嫌な予感しかしなかった。でも彼の為なら彼女は何も恐れなかった。

彼女が雨の中、急いで運動場に行くと、そこに彼は確かにいた。但し、勿論、何人かの男子の集団に取り囲まれながら。

「よく来たね、お嬢ちゃん。偉い偉い。」

彼を羽交い締めにして捕らえている横で楽しそうに見物する男がいる。きつとこいつが主犯と考えて良さそうだろう。

そして彼をよく見ると、空の暗さでよく見えなかったが、顔に幾つかの殴られた後が残っている。彼の顔も心なしか虚ろに見える。

「ねえ…彼に何したのよっ!？」

「これ以上近づくな!！」

主犯の男が怒鳴り散らす。前に進もうとした彼女の足が止まる。

男は彼の顎を掴み、誇った様に彼女に警告する。

「大事な彼の顔に傷痕を残して欲しいのか？」

その一言だけで彼女は充分だった。動ける訳が無かった。

そのまま暫く両者は動かない。

雨が静寂を嫌うかの様にざあざあと降り続ける。

「何が望みなのか？」

彼女は雨の音に混じるかの如く、小さくゆつくりと話し始めた。主犯の男はそれを聞き逃さない。

まるでその言葉だけを待ち望んでいたかの様に。

そしてにやりと笑った彼は一言。

「そうだな…この運動場を転がるってのはどうかな？」

男の仲間達が黄色い声を上げる。

喜びの歓声。卑猥な響き。

その歓声の中で初めて彼が声を上げた。

「やめろ！そんな事したら　！！」  
どん。

鈍い音。無言無表情で顔に一発。この男に血や涙という言葉は無いのかと思わせる程の冷徹振り。

「…っ！！」

「やめて！問題ないから…全然大丈夫だから！」

「そうだよな！彼氏の為なら転がるんだろ？」

そして傘を置き、雨に濡れて泥塗れの地面を彼女は、  
転がり始めた。

レインの耳に届いたのは同じ”何でも部”に所属している友人のペ  
ルマからだった。

「レイン君！お願い、助けてあげて！！」

「何だよ…身内問題は身内で解決しろよ…」

自分に利益にならない事は引き受けない。特に恋人問題なんかそい  
つらのせいなんだろ？と言いたかったレインの首根っこを掴み、ペ  
ルマは無理矢理ベランダに連れ出した。

「あの光景でも、あなたは助けれないと言うのなら、私は何でも部を  
辞めるわ。」

傍から見たら誰もが度肝を抜かれる、その光景にレインは笑いなが  
ら一言。

「残念ながら”もう一回”のお時間は終了だ。」

「はははっ！もう一回！もう一回！」

主犯の男は高らかに笑いながら叫ぶ。最早言葉に何の意味も無いかの様に。

彼女もどのくらい転がったのだろうか。綺麗だった制服は泥と雨に塗れ、綺麗だった顔も泥と涙に塗れ。

それでも彼女は転がり続けた。

「もう一回！もう一回！」

「もういいよ」

雨の中でも透き通る声。その声に誰もが言動を止めた。レインだ。

「そろそろ君も疲れたろうね？」

レインの左右には何でも部のメンバーが三人。

「レイン殿。拙者はこのような下衆共を許せない。」

右の侍風の男、ジャックは相当ご立腹だ。まあ当たり前反応だろう。

「ペルマちゃん、ええのー？」

「うん、遠慮無くやっていいよ。」

能天気な関西弁の少女、グロリア。それに対してペルマも相当腹が煮えくり返っているのだろう。

感情を抑えているのも分かるし、その怒りのオーラも目に見えると  
言っても過言ではないくらいだ。

「よろしい、ならば戦争だ。」

こうして雨の戦争の火蓋は切って落とされた。

「…お前らもコイツ殴るなら今の内だぞ？」

レインは主犯の男の首根っこを持ち上げながら、彼と彼女に告げる。

勿論四人があのにじめ集団を僅か数分で片付けた後の話なのだが。しかし泥だらけの彼女と、アザだらけの彼氏はどちらも首を振った。

「もういいよ。僕は彼女が無事ならいいのさ。」

彼女も首を縦に振る。私も問題ない、大丈夫と言っているかの様に。

「はっ！バカッブルとはつくづく困ったものだな！！」

そう言っつて、笑いながら男を投げ飛ばし、レイン達はその場を立ち去る。

「ああ、こんな下らない依頼の報酬はチャラだ！」

いらぬいらぬ。お前らの愛で充分だよ、馬鹿野郎が。

そう心に言い残し、レインは手をひらひらと振って立ち去ったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8120g/>

---

阿修羅の巷

2011年10月4日22時16分発行